

象徴の森（完全版）
夢とロマンを求めて

はじめに

まず、これらの一連の「作品」は、すべて「二十代」という「若い時」に書いた「作品」であり、当時、二十一歳頃、大学の寮にいて、いろいろな書物とともに、ボードレーやランボーあるいはマラルメなどのフランスの象徴詩などを好んで読んでいましたが、特に「マラルメの十四行詩」（鈴木信太郎訳）を読んだ時には、この世の中にこれほど美しい言語表現というものがあるのかと、まるで「美的言語表現の極致」を見るような思いがして、そのあまりの「衝撃」の大きさのために、自分にもこのような詩が書けたらいいなあという想いがなぜか生じてきて、右も左も全くわからないままに詩を書き始めたという次第であり、すべての「原点」は、まさにここから始まるのであり、それもこれも、あの時のあの強烈な「美的衝撃」がなかったならば、自分には詩を書く能力もまた文章を書く能力も全くないかと思っていましたので、恐らく、詩を書くことも文章を書くことも今日までなかったのではないかと思う次第なのです。それゆえ、これらの「作品」のなかで、あの時のような何らかの「美的衝撃」を感じてもらえるような作品が一つでもあれば、何よりも幸いなことであり、日本語の美しさとともに、このような若い時の作品を発表する意味もあるのではないかと思う次第なのであります。

令和四年八月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

はじめに

第一部

鮭と飛魚

真珠の涙

達磨

友

刀劍

創造

冬の海

漁

向日葵

食中毒

井戸

絵はがき

山水

梅雨の音色

忍の華

第二部

動物詩

鯨

鷺ライオン

獅子

虎

龍

麒麟

鳳凰

鶴

不死鳥

土龍もぐら

蝙蝠かろうり

かもめ

赤蛙あかがへる

ひよこ

(別記)

第三部

図書館

一里塚

ポ
ー
カ
ー

将棋

孤独

自由

第四部

十四行詩

暗室

海鳥

幻の滝

白鳥

夜の鳥

幻影

映像

野鳥

情熱

舞姫

幻の姿

幻の鳥

摩天楼

雄魂

挑戦者

スフィックスの謎

UFO

月桂冠

短距離ランナー

ネッシー

砂時計

第五部

蠟燭

夢見る乙女

禁断の恋

白雪

囁き

ときめき

晴耕雨読

嘘

つばめ

沼釣り

風船

氷山

水仙

金魚

第六部（別記載）

長詩

- 一、若き人へ
- 二、オリンピック競技
- 三、夢とロマンを求めて
- 四、不死鳥
- 五、その他

第一部

『一般詩』(口語体)

* 「刀劍」(つるぎ) 「忍の華」(文語体)

鮭と飛魚

今、將に暗雲の広がりゆく空の下、
逆巻き荒れ狂う波濤の波間より
遙か大空へと飛躍せんとす

その飛魚のごとき者よ！

たとえそれが極難の夢であろうとも
海中で眠ることなく、自らの力で挑み、
新たなる世界へ飛び翔ようではないか！

——激流のなか、
産卵を終えた鮭の身が

たとえその場で朽ちようとも、
若魚は新たな生命を授かり、
源流をめざして、また上るものだ。
それが自然の循環なのだから。

真珠の涙

貝なまこの中に 静かに眠ねむれる
ひとつぶ、ひとつぶの真珠の
澄あんだ海うみに深ふかく染み入る
碧空あおぞらの陽ひの光ひかりに抱いだかれる時から、
真珠は神秘なるその光輝かがやきを
身の内うちふかく宿すのですね。

達磨

河南省崇山かなん ずうざんにある少林寺こもに籠りては、
九年という長い間、
壁ひしりに向いて孤独座り込み、
何を瞑想（思索）するのでしょうか。
禅とは、
悟りとは、
それは内的体験（体得）のみが明かすもの。

ここに一つの達磨さん、
手もなければ足もない。
心の中も空からなのだろうか。
空はすべてを映す鏡なのか。
達磨さんにはどんな眼を……
——久遠くおんの光輝かがやきを放つ
開かれたその「魂の瞳」を。

友

君こそ、わが永き辛い友です。
君こそ、わが行動のすべての源泉。
時の流れ、四季の色合い
変わらぬものは君との対話……。
水の流れは止められません。
止めてはいけません。
いつだって君だけが家の主。
あるじ

刀劍つるぎ

暗闇、寂寥、月の影、
さあ、眠る劍よ。
鞘から抜けて出る！

木の葉さざめき、
よぎる戦慄、
振る孤劍の陰影。

天地の空に入り、
闇を裂き、揺めく
己れの影を斬る。

一きは冴える月に、
走る劍の閃光、
白刃に映る己が姿。

創造

—— クリエーション
—— 造 ——

それはもうどうすることもできないような
血も凍る戦慄の地の底を踏み越えては、
あらゆる支流に分離する以前の
滾々と湧き出づる源泉を見つめ、
もうなにかあるうとどうにもならない
大地に身をおき、脚下を見定め、
なお蠟燭の内に燃ゆる炎あるならば、
そこからきつと……
四季の色合い
小川の輝く調べ
色褪せぬものは……

冬の海

冬の陽ざしもやがては翳りゆく夕空の……
吹く潮の風は激しく肌をつきさしながら
波のうねりは絶え間なく荒れ寄せ返しては、
砂浜には遠くうすれてゆく孤独な足跡。

心が寒い……

すべてが空しい……

なにもかも信じられない……

そんな砂浜に深く刻まれた文字は、

寄せる波が消してくれるのでしょうか。

冬の海に独りたたずむあの友には、

こんな楽器を自ら捜し出してほしいのです。

——その楽器というのは……

心の揺れは音色の揺れとなり、

心の静けさは音色の静けさとなり、

心の激しさは音色の激しさとなり、

心の淀みは音色の淀みと変調するような

そんな君自身の音色を深く奏でる

確かな楽器を自ら捜し出してほしいのです。

それは底に深く眠れる本来の自己を見出しては、

新たな自己を創造していく魅惑の調べ。

そんな君自身の音色を深く奏でる

確かな楽器を自らの手で掴んでほしいのです。

それは過去の自己を映し出しては、

未来の自己へと成長する記念樹の調べ。

苦勞が苦勞ではなくなり、

努力が努力ではなくなり、

まるで自分の血肉のような楽器。

友よ、そんな確かな楽器を。

友よ、そんな確かな君の音色を。

海の夕日はすばらしい！

やがて夜空に輝くあの星を。

友よ……

漁

海上や漁港に潮の風は激と吹きぬけ、
夜空には
時折りなおも暗雲の影がよぎりて、
地上では
海鳴りが不気味にさわぐ海の揺れ。
あとは船の響きがより高まれば、
出漁だ。
荒海へ向かうそのうしろ姿は、
消えたり、現われたり、
だが確実にその歩みを進めている。

今は夜明け前の深い暗闇の最中、
船の照明に映えてゆれる海原では、
船はその幅を尚も狭めつつ、
声は潮風と混じり、とどろき渡り、
手は綱の辿りにその重みをはかる。
漁港よ、聴け！
この乱舞と煌めき躍る
その生々しい水しぶきを。
大漁旗よ、
今日こそ、翻れ！
暁雲、陽光輝くあの暁の空に、
雄々しく、高らかに、
もうこの全身につたわってくる
この手応えに狂いはない。

海の太陽で熟した胸、腕、顔、
それは海の男の輝きだ！
それは海の男のたくましさ。
仕事に「生命」を燃やす男とは
そういうもの……。
空に舞うかもめよ、
きみらもそう鳴いているのか……。
海をよぎる潮風よ、
きみらもそう騒いでいるのか……。

向日葵
ひまわり

穏やかに晴れて広がりゆく青い大空の下、
庭に咲く小さなひまわりにはこれという影もなく
ただ、ほんのちっちゃな流れ雲が、
時おり影をなげかけるだけなのです。

そんな小さなひまわりは、

如雨露から降り注がれる水を

一気に飲み干しながら……

ぶるぶると身を揺り起こしては、

真っ赤な太陽に微笑む

そんな小さなひまわりの花でした。

冬木を鳴かす木枯らしが吹きぬける初冬の

今は、なにやら重苦しい鉛色の空の下、

庭にはすでにひまわりの花はなく、

ただ、雪がしんと降り積もるばかりなのです。

でも、地に落ちて眠るひまわりの花の実の

いつかはめぐり来るその真夏の季節の、

大空に真っ赤な太陽がさんさんと

燃えさかる頃ともなれば、きつと

庭にはもつと大きなひまわりの花が、

空に、太陽に向かって咲き薫ることでしょう。

食中毒

うん

どうしたというのだろう？

この妙な気持ちに吐き気は、

脈は不気味に乱れ始め、

顔には額の汗と青ざめた口びる。

なんということだ！

早く、早く外に出さなければ……

たまに珍しいものを食べると、

いつもこのありさまだ。

暗くなるにつれて、

疼きは激しさをじわじわ深め、

七転八倒の苦しみ。

菌が全身にはびこり、

神経を不気味に蝕み始めている……。

みんな消化不良で出てしまえ！

全くたまったものではない。

頭脳のなかをむずがゆく

かっつになにかが蠢いている。

そいつはなんだ！

おお、不吉な魔物よ。

おまえはいつからそこにいるのだ。

なにやら得体の知れぬ不安とともに、

ある想いがふと浮かんでくる。

こんな時はなぜか

いつもそうであるように……

「なにもかも忘れて、

今はともかく眠ることだよ。

それがいちばんの妙薬なんだからね」。

井戸

わが庭の狭苦しい土地を、
魔に追い詰められては、
夜ごと、掘り起しては、その
地に眠れる僅かばかりの光輝に、
シャベルをむやみに進め、
地の底の暗さに怯え、身凍り、
すべて投げ捨て眠った。

奴隷にも似た夜ごとの労苦の、
肉体をじわじわ蝕む倦怠さ。
眼光、暗闇に妖しく輝き、
泥酔漢さながらの行動に、
突然、吹きあがる地下水は、
歓喜と戦慄への誘い水。
己が姿を映し出す井戸は、

地の底への入口でありまた、
わが生命の源泉。
井戸の水が満ちる時、
奈落の妖魔は消え去り、
わが生命の息は甦る。
暗く、澄んだ、
不思議な水を汲み上げる。

絵はがき

前略、今、ここにいます。
とても綺麗なものでしょう。
湯の香に揺らぐ夜景も……
あの日、一人旅立ちて、
この地にやって来たのです。
途中、驚いてしまいました。
登る山道の邊りに沿って、
ちよろちよろと流れる小川の
もう全身がしびれるほどに
冷たく深く澄んでいることに。
その時、ふと感じたんです。
この自然の美しさの奥にひそむ
その根源世界の静けさを……
大空にさえずる野鳥の音色も
山間に深く響き渡っては、
私に問いかけてくるようでした。
もう何も心配入りません。
岩風呂から一人上がり、
今は窓辺に浴衣姿でいます。
降るように煌めく夜空の星々と
湯の香に揺らぐ夜景を眺めながら……
夜明けには日の出を、野鳥の音色とともに
きつと素晴らしい朝になるでしょう……
——湖水もぜひ見たいので、
もうしばらく、この地にて、
次の絵はがきに書き添えます。
都会への旅立ちには、
——自然の源流の美しさと
この地の生気の香りをそつと甦らせ。

都会の友へ

山里に遊ぶ

悩み多き旅人より

山水 さんすい

谷川のせせらぎ
谷間に揺れるつり橋 はし。
朝霧の囁き、
萌え出づる若葉に
露と輝く。
風の微笑 ほほえみ、
揺れて散る露しづく。
山肌に
かすかな白雪 しらゆき
木立ちの霧と消え、
谷川のきらめき
空に野鳥のこだまする。

梅雨の音色

五月雨に紫陽花、
鳴き入るかわず。
軒の雨だれ………
乙女の頬に滴る。

家に沈む人たちの
うなだれて座す
その眼の下には、
静かに眠る白き布。

乙女よ、
咲く花は、
しずくにより艶を増し、
散りし花は、
その実により味を増す。

五月雨に紫陽花、
鳴き入るかわず。
軒の雨だれ………
乙女の頬に滴る。

乙女よ、
聴こえるであろう。
降りしきる雨の彼方に……
散りし花の
笑顔にも似た
目眩く
灼熱の太陽の音色が………。

忍の華

五感の内騒ぐ、その
白雪のやは肌……
針をさし入れながら
密に刺り込む絵柄、
妖しき刺青なる世界。

刺青師の心に熟す
絵の模様の趣き、
絵筆を躍らせ
大胆に描き出し、
手に光る針先の

静かに、亦、入念に
やは肌辿り入る感触と、
種々の顔料と絵柄の刺り込みに、
白き雪肌は血と汗とにまみれ、
悶え、喘ぎしのぶ忍の世界。

——光陰はながれ、
枯れ葉も散りゆく頃、
絵模様の
生き絵の精華には、
地肌の艶が咲き匂ひ……

湯殿に咲き薫る女体の
その乱れ肌もしつとりと
妖艶にきめ細やかに甦りて、
濡れる生き絵の模様の
艶を妖しく密に放ち輝く。

第二部

『動物詩』(文語体)

* 「ひよこ」のみ(口語体)

鯨

紺瑠璃の大空と海に吹き薫るその順風の海原にも、
空に密雲深く棚引き染む、黄昏、夕暮時の、
海鳥の群てうち騒ぐ大海原のその海中から、
遠く、幽かに、その姿を現しては、何時しか
波間の彼方に消えにし姿の、今宵、そして、
真夜中、照りては翳る妖しい月の光に蒼褪めし、
重苦しく、不気味にうねり高まる海原のその底から、
長きまた深き沈黙をうち破つて現れ出でし鯨の
空に海上に躍り上つてはまた海中に沈み入るごとに、
虚空に舞ひ狂ふ飛沫の迸り、乱れ舞ひ散る泡沫の
逆巻き乱れ狂ふ浪に戯れながら、吼える巨鯨の
その息吹を汐と大空に吹き上げては魔神の出現の如くに、
大海をわがもの顔で勝ち誇りては躍り狂ひつつ、その
海中を八方自在に泳ぎ廻つては、自由に獲物を捕へ乍ら、
夜半を徹して暴れ猛り狂つたその巨鯨も、やがては、
暁方の廣がり染む大空の明けゆく水平線の彼方にと、
何時しかその姿は遠く幻影のやうに消えてゆく……
海原は、再び、深き紺碧の海と静まり返りて、
目眩く太陽の陽ざしを浴びて煌めき映える海原の
穏やかにゆらゆら廣がり満ちては遠く光輝く……。

鷲

天空へと遙かに聳え立つたその断崖に、
巢を置き据ゑ、光陰を重ね過しては、
眼上遙かに、亦、眼下遠く 果しなく
廣がりゆく大自然の息吹の中へと飛び立ち……

上空から

雷光（霆）の如くに

急降下しながら……

空に、

海に、

陸に、

獲物を遠く追ひ求めては、

大空を孤独あてなく流離ひながら、

技量を磨き深めし若鷲の頃。

生死の深き谷間を猛しくさまよふ

激しき放浪のその最中に、

精悍なる光輝を奥深く宿す

ゼウスに寵愛されし荒鷲の鋭瞳、

なほも新たなる獲物を追ひ求めては、

新天地をさすらふのであらうか。

今は上昇気流にその身をまかせ、

高遠なる大空に両翼を拡げながら

悠然と舞ふゼウスの愛鳥……

かのゴールデン・イーグルこそ、

大自然の息吹のその中

自由を得、謳歌するものの

果しない羽搏きなのだらうか……。

ライオン
獅子

おほぞら ひとは 炎と燃えて 光輝き活動し続ける巨大な火輪、その
陽光熱く燦々と降り注ぐ雄大な原野の地を、夜、昼間ともなく、
野生の鬣を振り紊しながら、雄々しくも果しなく躍動しながら
広がる大草原を縦横無尽に駆け巡りては、地上をまた大地を激とし
揺るがし、烈火の如く炎と燃え盛つては、飽くことなき激闘に
その身を熱く燃やし焦がし続けた、若き日の傷痕を深く秘めては、
夕日に映えて靡く百獣の王の鬣の 幾千の河川の流れを集めて
満ちる、大海の如き遙かなる瞳を光輝かせ、眼下千尋の深き谷間
の底から、勇と這ひ登る若き獅子たちをちつと深く見守りながら……
吼える獅子の唸り、猶も猛り狂ふ怒濤の響きの如くに、その
唸りは遠く天地に轟き渡りて、岩上に勇然と立ち尽くす姿の
夕日に深く映えて琥珀色にと染め変り、原野を走るその勇姿は、
広がる黄昏の大空と大地との空間を幻影のやうに駆け巡る……。

虎

此の地上に存する夥多なるものを呑み込む深海の如き静けさと、活火山の地下で絶えず燃え滾る岩漿の如き烈しさを内深く宿して、原始林の森林深く何故か孤独棲み居るといふ、その雄々しき猛虎の鋭眼、原野千里を無尽に駆け巡りては躍動して追ひ深め待つ、その獲物を冷徹なる輝きでちつと深く見据ゑながら、柔軟なる姿にくつきりと鮮明な縞模様、孤獣の王たる紋章の証を、精悍な顔の額に寄せては、白き髭にはその深き苦悩を匂はしながら……走る猛虎の唸り、眼上また眼下千尋の山間にと深く響き渡りては、竹林に疾風をまた嵐を呼び起して、群居ることを余り好まぬ孤独な研ぎ澄まされし力量を内深く秘めて、滾々と尽きることなく湧き出づる源泉の水で、心の渴きを深く潤し、満たすといふ……。

龍

風雲を呼び起しては、雨を地上に降らす
暗黒の深い淵の水底に棲むといふ、その
凜々しき天龍は、天と地の生命の渴きを
深く潤し、大海の逆巻き怒り狂ふ、その
怒濤の波間より、飛龍と舞ひ昇りながら
龍顎の宝玉は暗闇に久遠の光を放ちつつ
襲ひ荒れ狂ふ暴風雨を、闇に走る雷光を、
空に渦巻く暗雲を、黙然と貫き舞ひ昇り、
眼下に廣がりて棚引く雲海の雨は地上の渴きを
深く潤し、大空に雄々しく舞ひ躍り入る青龍の
廣大無邊なるその世界に白龍と舞ひ翔り入る……。

麒麟

此の世に聖人の出現を告ぐる瑞徴として現れ、
生草を踏まず、また、生物をも食はず、
全身から五色の光輝を八方に放ちながら、
千年の長きを生き、時には大空を舞ひ翔りては
躍動するといふ、何よりも仁を愛する

——かの一角獣の瑞獣、麒麟は、

乱世と、乱れ狂ふこの地上でその頭角を現し、
師子奮迅の活躍をする若き優者たちの、その
中で、殊に優れて智、勇、仁をフルに發揮し、
塵風、砂塵逆巻く地を縦横に駆け巡りては、
乱れ荒れ狂ふその地を鎮め、治めるといふ
その若き優者の、やがて聖人となるを見定めては、
此の世に聖人の出現を告ぐる瑞徴として現る。

「麒麟」は、中国の想像上の動物であり、

次の「二つの場合」が考えられている。

- ① 一つは、聖人が世に出る前に出現して、聖人の出現を告げる瑞徴として現われる場合。
 - ② 一つは、聖人がすでに世に出ていて、実際に徳政を行なっている瑞徴として現われる場合。
- ここでは、前者の考え方に沿った「作品」になっている。

鳳凰

己おのがその身みには幾いく獣じゅうなる姿すがたを兼あね合あせ持もちては、
梧桐あをきりの深ふかき森もりに宿やどり居いて、竹たけの実みなどを食くらひながら、
醴れい泉せんの水みづを時ときに吞の氣きに味あじひては喉のどの渴かわきを満みたし、
大おほ空そらに飛と翔りする瑞すい鳥てう、鳳ほう、凰わうは、夕ゆふ暮ぐれに、また、
深ふか夜やの世界せかいに不ふ氣き味みに立たち籠こもる深ふかい山やま霧きりの　その
奥おく底そこから濡ぬれし兩つ翼ばさを拡ひろげ、虚こ空くうに舞あが上あつては、
時とき間かん、空そら間かんを超こえて、無む限げんの世界せかいにと舞あが遊あびて、
遙はるかなる世界せかいへと自じ由ゆう奔ほん放ぽうに舞あが翔あり得える……
五ご色しきの文ぶん様さまに色いろ彩さいられて光ひかり輝かくといふ、その
自じ由ゆうの兩つ翼ばさを曉げう闇あんの大おほ空そらへと羽は搏ばたき、飛と翔ありながら
啼なくその聲こゑ音ねは、地ち上じやうに夜よ明めいの時ときを告あげるといふ。

鶴

吹雪、暁闇、太陽の光。
冬枯れて凍てつく大自然の
廣大なる原野の厳冬地に
流れてなほも尽きせぬ
水の不凍のそのねぐらに
顫へて佇む 丹頂鶴は、……
新芽眠る雪原を羽搏きながら、
遙か碧瑠璃の天空へと舞ひ上る
天翔る瑞鳥の姿さながらに
愛の訪れ、全身で謳ひ上げつつ……
雪解けに精華の咲き匂ふ湿原地の
廣大にして果しなく廣がりゆく
大自然の世界へと舞ひ翔る麗姿の
啼く聲は白く天空に響き入り渡る……。

土龍もぐら

なにやら奥暗くらき

土の中ながを

土龍もぐらは、

今日も飽きもせず、

何を好んで、

孤独ひとり、せつせと

手を動かし、

足を進めながら、

あちこちと、執拗しつごうに

餌をさがし求めつつ、

あれこれと熱心に

手を動かし、

足を進めながら……

土の中ながを

四六時中、

駈けめぐつては、

やがて、土の上。

しばらく

うろちよろしては、

眩くらしさを嫌きらひ

土の中、

奥へ奥へと

想ふにまかせて、

黙々と

飽くなくどこまでも

新たな餌を追ひ求めつつ、

手を四方に動かし、

足を前に進めながら……

土龍もぐらは、今日も

飽きもせず、

土の中を、さらに

奥へと掘り進んでは、

もうその穴は、

八方に深く探さぐり入った

木の根ねつ子のやうに、

やがて、また

土の上。

土龍は、
しばらく

地上を

不慣れな様子で

あちこち動きまはり、
きよろきよろしては、
やがて、

もぐらが一言……

モグ、モラ

『眩しくて、も

のがよく見えません』
また、土の中へと。

蝙蝠

暗くて何やら不気味な洞窟の、その岩壁に逆さにぶら下つては、身を其処に沈め置き、昼間、活動する生き物を何故か冷笑しながら、暗闇の世界に好んで手翼を拡げて飛び立ち さ迷ふ 蝙蝠の、今宵また、新たな獲物を捕へては孤独、密かに北叟笑み入る……。

暗闇の世界を好みて、光明を嫌ふその習性は生来のものなのか。

それとも生れ育つた環境に深く由来するのか、ともかくも、

真夜中、再び、妖しい手翼を照りては翳る月の光に拡げ、飛び立ち、底知れぬ暗闇の世界の奥底を深く凝視めては孤独密やかに耽り入る。

此の世の光と影とが織り成す矛盾に色彩られた世界を冷徹やかに見つめながら人間社会の最も暗部の陰影深き暗黒世界を好んで凝視し、孤独眼光を輝かせ、此の世の暗闇の世界に蝙蝠独自の超音波を放ちて、再び深夜にはその手翼を拡げ、眼で捕へられぬ獲物をも、鋭敏かつ敏速に捕へては、孤独深く悦に入るといふ。

かもめ

荒波あらなみの寄せ返かへる

岬みさきに、

女ひとがただ一人、

遠とほく大海うみを見てゐる。

髪かみをなびかせ、

瞳ひとみを濡ぬらしながら……

空そらに、

海うみに、

自由じゆうに

舞まひ翔ばうぶ

鷗かもめよ、

今いまこそ、

伝つたへてほしい。

その涙なみだに霞うつつろむ空虚ひとみな瞳ひとみに……

心こころを濡ぬらす

頬ほのしづくが

光ひかりを放はなつその時から、

心こころの底そこの底そこには、

白しろい羽うが

静しずかに

やさしく

舞まひ降りて、

いつしか

海うみに

大空たいくうにと

自由じゆうに、

力ちから強く

羽は搏たいては、

遠とほく舞まひ翔ばうり得える

神かみ秘ひなる

両つばさ翼つばさになることを……。

夕日ゆふひに染そまる

その横顔よこがたに……

鷗かもめよ、

静しずかに

やさしく

空に、
海に、
自由に
舞ひ翔ぶ
鷗よ、
今こそ、
伝へてほしい。
荒波の寄せ返る
岬に、ただ
一人たたくむ
その耳元に……
鷗よ、
静かに
やさしく
太陽の沈み入る
そのまへに……

赤蛙あかがへる

赤蛙よ、

愚か者め！

下流の静流が見えないのか？

赤蛙よ、

無知なる者よ。

ここが激流だと知らないのか？

ああ、愚か者め！

無知なる者よ。

なぜ、

激流を選ぶ。

なぜ、

困難を愛す。

失敗は眼に見えてゐる。

なのに何故なにゆゑ繰り返す、

どうして身を苦しめる。

赤蛙よ、

愚か者め！

下流の静流が見えないのか？

赤蛙よ、

無知なる者よ。

ここが激流だと知らないのか？

なぜ、どうして

何のために……

問ふ言葉はむなしくすれ、

荒れ狂ふ激流にまた飛び込む

黙して語らぬ、赤蛙よ！

そこに何を見たといふのだ……。

ひよこ

——ひよこよ、

なぜ、鳴いているのです。

ピヨ、ピヨ、ピヨ、

今は、孤独ぼっちだから……。

寂しそうなひよこよ、

どこからやって来たのです。

ピヨ、ピヨ、ピヨ、

ずっと金あみのそのなかで、

ぼんやり時を過ごしていたのです。

それなのに、ひよこよ、

どうして、今、ここにいるの。

ピヨ、ピヨ、ピヨ、

そこから庭に出て、

あちこち餌をさがしているうちに、
道に迷ってしまったんです。

それに日向ぼっこが好きだから。

風変わりなひよこよ、

——ところで、

どうして体の色が黄色いのです。

ピヨ、ピヨ、ピヨ、

それは、まだ、

迷っているからなんです。

黄色いひよこよ、

どうしてコケコッコと鳴かないのです。

ピヨ、ピヨ、ピヨ、

夜明けを告げるの、

ふつう大人の仕事だから。

のんきなひよこよ、

なんでピヨ、ピヨと鳴くのです。

ピヨ、ピヨ、ピヨ、

鳴くのやめちゃうと、

自分を見失ってしまうんです。

妙なひよこよ、

——にわとりは、

なぜ空を自由に飛び翔かけないの？

ピヨ、ピヨ、ピヨ、

ずっと怠なまけていたために、

翔とべなくなってしまうんです。

摩訶まか不思議な鳥よ、

羽があるのにどうして翔とべないの？

ピヨ、ピヨ、ピヨ、

いつも羽搏はばいていないと、

だめになってしまっんです。

大空遠とおく舞まい翔かけり得る、

真まの翼つばさにはならないのです。

へんちくりんなひよこよ、

これから先、どうするのです。

ピヨ、ピヨ、ピヨ、

大きくなったら、

野生の鳥になりたいんです。

第三部

『一般詩』(文語体)

* 「図書館」のみ(口語体)

図書館

秋の陽光に映えて舞い散る
銀杏並木のその道ふかくに、
静かに息づく「図書館」の……
時の濾過に清められし
精選の書物に宿る
人の叡知の清流は、……
かすむ瞳にうるおいを
あせた唇に艶やかな生命を
心の渇きに枯れはてぬ源泉の調べを……
——そんな心にしみ入るひと時も、
館のともしび消える頃、
夜道を歩む足元を
照らすかすかなあの星も
何千光年の調べなのか。
ふと吹く夜風に、
思いははかなく消えてゆく。

一里塚

儂い旅路の道すがら、
人は今この時の一里塚に、
想ひ想ひの木を植ゑてゆく。
ならば時には振り返り……
何でこんな苗木を植ゑたのか？
枯れてしまつた木もあるだらう。
成長をし続ける木もあるだらう。
それらの姿をぼんやりながめ、
何で枯れてしまつたのか？
何で成長し続けるのか？
そこに自己の姿をながめつつ、
人は春夏秋冬、その折々に、
前方にはなにもない、
今、この時の一里塚に、
新たな苗木を植ゑてゆく
儂い旅路の道すがら……。

ポーカー

——一室の、重く扉ドアーの閉ざされし密室には、
円卓テーブルを囲みてカードを見詰める四人の勝負師……。
或る者は葉巻きを宙にゆらり燻くゆらせ、また、
或る者はグラスを傾け、喉の渴きを潤うるほしながら……
数多あまたのカードの、手中で初めて生きるカードの、
夜を徹して果しなく繰り広げらるる。その
場の微妙な動きと変化をぼんやり凝視みつめながら、
読みの深さと確率に賭ける勝負の、白昼、また、
夕暮ぐれ、真夜中、一時、二時と、時は淀みなく流れ……
何時いつしか二人の姿は場から消え、残る二人の
寡黙しづけさに、カードの読みの冴えは鋭く、深く、
チップの響きも緊張も重く、息苦しく高まり、
果なき勝負もその佳境へと深く溶け入る頃、
冷徹と燃ゆる瞳にふと浮ぶ幽かな微笑の、深く
覚めきつた眼ざしで、互ひの手を読み図はかりつつ、
心に浮んでは消ゆる想ひと読みと感觸の、胸中に
絶間たんまなく寄よせては返かえす潮うしほの波とその騒めき……
時の重みが肉体の精神の困憊と深まつてゆく頃、
勝負の切り札には、どんな想ひのカードが
心の中で舞ひ、心の眼は何を深く見詰みつめるのか。
窓琥珀がらすずにからみ合ふ模様のカーテン越しに、
さし入る夜明の陽ざしが眼につらく、眩しい。

将棋

遠い昔には唐の夢、
荒海越えて伝へられ、
今もなほ、この地に
深く根づくその将棋には、
血肉の騒ぐ底知れぬ
魅惑と深き読みが舞ひ踊り、
辛き沈黙耐へ抜いた
兵を操る手応へと、
敵と己れとその戦場で、
果しなく繰り廣げらるる
両者の攻防の、その微妙な
動きと変化の最中に揺れ見抜く
冷徹緻密な読みを深めては、
敵陣崩して、奥へと攻め入り、
脳裏に閃き浮ぶ、幾手、幾十、
幾百の読みの限りを尽して
王将追ひ詰める醍醐味が、
何とも言えぬ音と響き、
今なほ消えぬ王将の
勝負師の歩には闘魂の
赤き炎が燃えてゐる。

孤独

孤独、その響きは、
何んと寂しく、また、
何んと激しい白雪の調べ。その重苦しい
鉛色の空から音もなく舞ひ降りては、何時しか
降り積る白雪の、原野は別世界と染め変りつつ、
世俗の塵は静かに、亦、深々と雪下に消えてゆく……。
新雪を歩むその足の感触、深く確かめながら、一步、
一步、行方も定まらず、身は舞ふ雪花にまみれながら
踏み惑ひ入る想ひの苦惱、憂愁、不安、焦燥、さらに
吹き荒ぶ吹雪に視界を遮られては、苦悶を重ねつつ、
何故にまた飢ゑて孤独彷徨ひ入るのだらうか。
今、踏みしめた足跡さへ、空しく幻影とうすれゆく……
ああ、だがこの旅は、新たなる世界への孤独旅。
ただ孤独でありさへすれば、それでいい。やがて
何時しか雪も解け始めて小川の調べ、速水と勢ひ流れ、
陽の光の深く染み入る残雪の地中から新芽萌えいで、
木々では野鳥が大空に鳴き騒ぎながら空高く舞ひ翔り
入るだらう。その光景はいつもながらに瑞々しい……。
——孤独、それは何んと寂しく、また、何んと激しく
人の心の底の底にまた静かに舞ひ降りる白雪の調べ……。

自由

自由、その姿は、
何んと美しく、また、
何んと妖しい罌粟の花。その身に
咲き誇れる花びらは色彩豊かに咲きみだれ、
甘く、やさしい甘美なるそのかをりに、
うつとりと酔ひしれながら、その毒は、
人の心の底の底までじわじわと蝕み狂はす……
この世に咲き薫る自由の罌粟の花と、
心の奥深くに咲き匂ふ自由の名花の
その地に深く縦横に根を下すまでの
長くもまた厳しいその調べを忘れてはいけなだらう。
浮世の流れに浮んでただよふ根なし草は、
気ままな自由の調べに酔ひ痴れ、溺れながら
ながされ、いつしか流れの藻屑と消えてゆく。
——大地から遙か大空へと
そびえ立つ木々の雄大さこそ、
そのまま根の姿の映し絵の調べ。
風雪にさへ耐へうる確かなる根を
心ふかく縦横にその根を下してこそ、
その枝に名花も咲きにほひ、
木の葉にも瑞々しさが再び、甦る。

第四部

『十四行詩』(文語体)

* 「短距離ランナー」のみ(口語体)

暗室

光と影とが混沌と深く溶け合ふ昔ながらの暗室に独り閉籠りては、
孤独なる心よ。瞑想の中に深く眠れるその白い感光紙の上に、
尚また何を映し出そうと試みるといふのか。今宵は、さらにまた、
過去と過ぎ去りし光陰の、其等の陰画に光を深く射し入れながら、
時間は恰もかの吸血鬼の如くに肉体に深く食ひ付きては、
刻々と、生き血を啜る戦慄の響きを淀みなく奏で刻みつつ……
現像の彼の魔液に不気味に浮び上つて来る陰影深き像の
あるがままの姿を唯々あるがままに深く凝視めながら……

人はそも幾度、瞑想世界の中に耽入るといふのだらうか。
時、空間を無限の暗闇に深く吞まれし孤独な密室には、
想に取り憑かれて、探り求め、飽くまで追ひ深める人の……

空想（思索）は自らの翼で飛翔りて、孤独果しなく流離ひながら、
多様に満ちた現実社会と、その奥底に深く眠れる真実、真理等の
根源世界の深みにと忘我と深く溶け入り、肉体は唯、此の地に存す。

海鳥うみどり

遙か碧空へと此の地上から揺れてさまよふ陽炎の姿にも似て、
新たに舞ひ吹き起る海上の息吹をわが帆になほも孕みつつ……
さあ、船出をしよう。見果てぬ遙か沖の大海原の彼方にと、
纜を解き放ちて、揺ら揺ら蕩揺ふ波に深く酔ひ揺れながら……

遙か遠く廣がり行く視界の大海原には、新風、群て舞ひ翔ぶ
海鳥、入道雲もくもくと、大空と大海とが深く溶け合ふ水平線の
尚、彼方には、帆柱には一羽の海猫留まりて、船の激しく波に大横
揺れする度毎に、風変りな鳴き聲を密に曇らせては、急変して、

大空に俄に襲ひ狂ふ暗雲、暗闇を引裂き轟き渡る雷光、その
逆巻き猛り狂ふ荒浪に翻弄され巻き込まれる船の、ただ
喘ぎ軋めき、海図、羅針盤も狂ひて、為す術とてなく、ふと

密雲の切れ間のその奥から矢の如く射す、束の間の
此の神秘、此の戦慄、そして、此の目眩く眩暈の光輝き。
ああ、永遠をまた天空と大海とを貫き通す一条の陽光の……

幻の滝

未だなほも遠く踏み込れぬその山奥の

滝を彩るといふ七色の精彩を孤独追ひ尋ねつつ、

深山の奥深い昼なほ暗き幽暗なる世界に迷ひ込んで、

遠く寂れて乱れ繁る山道の草むら踏み分け入り……

尚、幾山河、源流の水の逆り舞ふ幻の滝を追ひ尋ねつつ、
闇の夜の恐怖に幾夜ともなく煩ひ彷徨ひ入る草枕の旅路。

遙か秘境の尚も、遠く込れぬ深山の飛泉の地では、

立ち籠る山霧、霧雨、眼下に流れゆきて、千尋の溪谷、

新緑の山中、滝壺に広がる深い霧も和らぎ、うすれ、

清冷な大気の白露に太陽の光の深く溶け入り合ふ頃、

大自然の満ちる山水の光景、瑞々しく甦らせ、

野鳥の舞ふ荘厳な岩走る滝に流るる天然の調べは、

七色の光輝く精彩を、逆り舞ふ飛沫の間に間に、

奥深く密に果しなく精妙に奏でるのであらうか……。

白鳥しらとり

森羅万象しんらばんしやうのその姿すがたを朧おぼろに映し出す
深く透き徹とほる湖水みづうみの面おもにも似て、
地の底を映す鏡に魅入いらるる時から、
人は深い哀かなしみを知らう……

寄せる漣さざなみ、舞ふ木の葉しぐれ、
晩秋の眩暈くらめき、厳冬に沈み入る頃、
顫ふるへて眠れえぬ 吹雪の夜の
凍る湖に蹲うづくまる白鳥しらとり、古巢を懐なつかしみ、

目眩めぐるめく新たな陽ざしの羽搏はばたきで、
遙か碧空おほぞらに飛翔する そのときめきも
身の哀かなしみ、なほ碧瑠璃へきるりに深く、

白雪しらゆきの溶けて谷間たにまを激とし流ながれては、
岩碎くだき、水底みなぞこを逆さかり流るる間に……
地上ちじやうの大地を深く潤うるほし、新芽萌ゆとも

夜の鳥

想ひ入るともなしに想ひわづらひ入るせつなき思ひは、
絶間なくゆらゆらゆらめきゆれる湖水のそのやうで、
群雲のきれ間の奥からあらはれ出づる 月の光にふるへ、
行方とて知れず漂ひみちる、晩秋に舞ひくるふ木の葉……

狂ほしく燃やし深め続けては、奈落の炎のその底から、
甦る夜ごとの鼓翼の、緋色の火輪に深く魅入れながら
天空に一途に飛翔する若きイカロスの運命にも似て、
その身の両翼の崩れかかる音色を聴くべきだったのか。

苦悩の闇に誇らしくも咲きにほふ窓辺の多様な花々も、
目眩い夜明の太陽の光に色褪せては、萎れゆく花の運命を、
ただ茫然として術もなく、孤独眺め居るばかり。

この地上に数多咲きみだれ狂ふ種々の花びらの奥深く
舞ひ躍り入る胡蝶の 深く秘められし雌蕊にふれる時から、
花は自らの果実を、やがてその木の枝先に確と結び付けるのだらう。

幻影まぼろし

人はそも如何なる陰翳いんえいを見るといふのだらうか？
あの満ちた月の筆舌を拒絶するその確かさに……
ああ、どんな香りを嗅ぐといふのだらうか？
その散りゆく花びらの底しれぬこの静けさに……

人はそも如何なる音色を聞くといふのだらうか？
あの茜あかねの空に飛び立つ鳥のその羽ばたきに……
ああ、どんな顫ふるへを感じるといふのだらうか？
この咲く花を舞ひ散らすかの一陣の風に……

風は吹き去り、花は咲き散る。

月は満ち欠け、鳥は啼きゆく。

ああ、孤独彷徨ひとりさまよひ歩くその空虚うつろなる瞳ひとみには、
見るものすべてが心象の影と揺めくのだらうか……。

胸を絶えず抉えぐる、寄せては返す潮騒しほさみ。

暗闇くらやみの苦悩くなうに満ちた心の深海での……

その騒めきが失せる時から、人はまた、
新たなる旅立ちの日を迎へるのだらうか……。

映像

海、浜の夕景色は、すでに幻影とゆらめき、
波、猛り狂ふ怨望も消え去りにし、
光なき旅路のその行くすゑは、
離れ、疲れたこの身を
人家の灯も遠く見えぬ
さびれし海の砂浜に横たへ、
静かに眠らう。この夜空の下、
きつと深いやすらぎが
僕を待つてゐてくれるにちがいない……。

ふと身の寒さにめざめ、
朝靄うすれゆく海の彼方に、
見よ！
深紅に震へて昇るあの太陽を……
大海のきらめき揺れるその光と影とを、
暁雲、陽光輝く果しなき空のこの美しさを……
ああ、今、この一瞬に生きてゐる
それだけで、たくさんだ！

浜の潮の風は肌の眠りを覚しつつ、
潮騒は胸のいたでを洗ひ清め……
とめどもなく湧きあがるこの想ひ。
生きるのだ！
この雄大な自然を友として、
さあ、歩もう。
大地を踏みしめ、どこまでも、
この地平の果に、
きつと心満たすなにかが
僕を待つてゐてくれるにちがいない……。

野鳥

鬱蒼と乱れ生ひ繁る枝葉の密に絡み合ふ奥深い密林を彷徨ひ
歩く迷ひ人の、地図また磁石類は狂ひ、惑ひ、踏み入る足元の……
幾重にもなほも重なり合ふ枯葉に孤独深く埋もれながら、ただ
不気味な生き物が奇異に騒ぎうごめく木の葉の揺めき、その

幾夜も幾夜も息苦しい密林の物の怪に悩み憑かれて、朦朧と、
缺けては満ち返る月の夜に森の精の幽かな姿の、孤独、ただ
毒蛇、底なし沼、風土病の発病などの恐怖に戦き、怯えつつ、
ああ、こんな密林を何時まで彷徨ひ歩けばよいのだらうか。

月の光の深く射し入る遠方の茂みのその奥から、やがて、
底深き暁闇の密林に野鳥の鳴き聲は密として高まり、
ああ、月影はうすれ、太陽は震へて昇る 莊嚴な自然よ。

何よりも行動を愛する心よ。密林の樹海に訣別の時を告げては、
さあ、廣大なる大地にと足を踏み出し、此の世のあらゆるものを
自分の五感と精神とで深く確かめ密に味ひ入るのがよいだらう。

情熱

踏み惑ひ入る奥深い山道を、
山霧、暴風雨、暗闇、暗雲引裂く雷光にうち慄へる時、
野鳥の聲の、木々から消え、地上に舞ひ狂ふ木の葉は、
乱れ朽ちて、吹雪、冬枯れ、凍る湖水に白鳥うち沈む時、

帆に尚も新たに舞ひ起る海上の息吹を孕みながら……

見果てぬ大空と大海との彼方に孤独旅立つてゆく時、

——北の極の海に不気味に浮び漂ふ氷山の、その
氷塊をうち溶かす術とてなく孤独身凍り入る時、

沈む夕陽よ、海を大空を赤き血潮で染め上げよ！

——鳥は、濡れし両翼を羽搏きては金色と輝き映える
大空に、再び、不死鳥と舞ひ上ることができ得るだらうか。

頑強になほも沈黙を深く愛して語らぬ金剛石よ。

今は寧ろ、その永遠なる光輝を、そして、
無限の時間と空間との狭間に、その久遠の光を放て！

舞姫

熱氣の息などの籠るる 空気の何やら妖しいその舞台の上には、
忽然と、暗闇に艶く色彩の光源を浴びつつ、躍り出でし舞姫の
悩ましい調べにその身を官能的に踊りくねらせ、舞ひ入りながら、
今宵はまた如何やうな艶姿を見せてくれるといふのだらうか……。

蜜を匂はす熱き身に幾重にも纏わり絡み合ふ華やかな衣装の
舞ふ風に妖しく優麗に揺らめく薔薇の花弁のその麗姿のやうに、
一瓣、一瓣艶かしく舞ひ散らし妖艶に舞ひ踊り入りながら、つひに
神秘なる薔薇の生命が、今將に眼前に赤裸になるといふのだらうか……。

波うちうねり寄せくるふ潮騒の狂ほしくも切なきその高まりに、
身悶え喘ぎながらも尚も浜を濡らしてとめどもなく満ち溢れ狂ふ
その海の深淵まで忘我と追ひ深めては、息も気も絶え絶えの、
悲愴なまでに恍惚と己が官能なる世界にと深く溶け入りながら……

妖しく燃え狂ふ官能世界に深く酔ひ痴れ、溺れ入りながら、つひに
その官能なる「恍惚」世界の絶頂へと登りつめたといふのだらうか……。

幻の姿

奈落の深き夜の夢にふと現れては亦、
何時しか消えゆく未だ名も知らぬ幻の姿……。

山懐 深き地中のその奥底から源泉と湧き出で、流るる水の
清濁雑多なる流れを集めて川となり、海と満ちる海原、海鳥、
密雲棚引く空の、薔薇の夕陽と深く溶け入り合ふ夕空と海の、
真砂の浜辺に寄せ繰り返す 満ちる汐の波とその騒めき、ふと

夜空の暗闇から燃えて隕石の深く波間にと落ち入る時、
空に乱れ舞ひ狂ふ飛沫の 送り、海原に満ち溢るる泡沫の
白き花の生命の精華を追ひ深め抱き、深く溺れ入りながら……
寂寥、暗礁の海を孤独憑かれし如くさ迷ふ夜ごとの労苦の

——哀しみに深くうち沈む時、苦しみに孤独喘ぐ時、
絶望と暗闇との深き奈落の底に顫へて眠るその真夜の
暁方の夢に仄かに現れては、消ゆる姿よ、未だ見も知らぬ
幽かなその麗姿こそは、新たな夢見の 幻の姿、なのか。

幻の鳥

大空、遠く自由に飛び翔り得る野鳥の

その両翼は如何にして得たといふのだらうか……。

あの巨大な爬虫類が数多群居て動き騒ぐ中生代の、乱れ生ひ
繁る多種な裸子植物に登りて飛び降り、地上を彷徨ひ歩き、
何か獲物などを追ひ求め捕へ、時に恐龍に追はれ地上を走り、
また樹に登りては再び枝から枝へと移行したり、地上に

飛び降りるといふ果しない繰返しの光陰を過す最中に
群て騒ぐ巨大な恐龍に襲はれ、追ひつめられ、終に
大空へと飛び立つことを知った生物の、それは、
まさに生死の深き淵をさまよふ決死の一瞬の飛躍。

原始の海から誕生し、何十億年の時間の経過のなかで、
生命は果なき進化を無限に繰返しながら、やがてその
身に羽毛を得た生物の、終には大空へと両翼を廣げて
飛翔るその先駆こそは、幻の鳥、原始鳥、なのか……。

* 「鳥の起源」説には、いわゆる「三つの説」がある。

- ① 樹上滑空説 …… 木から木へ跳んでいるうちに、しだいに滑空の習慣を
獲得し、やがてうところが羽毛に変化したという説。
 - ② 地上滑走説 …… 地面を速く走ったり、跳んだりしているうちに、うろ
こがしだいに羽毛に変わったという説。
 - ③ 定温獲得説 …… 最初、羽毛は体を温めるために生じ、やがて飛翔にも
使うようになったという説。これが最新の説。
- * 始祖鳥 …… 現在の鳥の直接の先祖ではない。

摩天楼

此の世に誕生して生きては消えゆく人の身の 小枝に実れる
労苦の究極の果実さへ、群居る鳥の餌食と食ひつつかれ、
挙句は、流るる光陰の深い忘却の淵に埋もれ、消えゆく
運命を思ひ、苦悶を重ねつつ、尚も想ひ悩み深まる夜の……

広大なる宇宙空間に久遠の光を放ち、永々と光輝く星群、
其等を、天上の星、と仰ぎならば、此の地上に吹き
荒れ狂ふ暴風雨、煩惱、苦悩、塵埃にまもれながらも、
尚、天空へとそびえ立つ高楼こそは、まさに摩天楼。

邪悪なる幻想に憑かれて想ひ悩み入る病弱な精神と、
安逸を求めてやまぬ哀れな肉体の、所詮は、
空しい、無益な反抗の中で、なほも苦しみ、喘ぎ、

遠い昔の、かのバベルの塔にも似た、愚かな
幻影の、たとへ儚い蜃気楼であらうとも、

幻の摩天楼よ、待っている！ 彼の血潮はまだ紅い。

雄魂

夜空に白光なる軌跡を残しながら何時しか消え去りゆくかの彗星の姿にも似て、何時の世にも、時、空間を超えて語り継がれ、消えては再び甦る不死鳥のごとく、その昔から半神と称せ、讃へらるるその英雄の、休みなく活動する巨大な情熱をその内深くで烈しく

燃やし続け、地下、地上、大空の世界を縦横無尽に駆け巡りては躍動しながら、此の世を地上をひたすら走りつづける雄姿の……絶望、暗闇、苦悩、憂愁、苦難、暗礁、暴風雨、泡立つ怒濤、そして、此の世のまた地上の塵埃、煩悩を知りぬいてゐる心の……

深い哀しみを帯びて満ちる藍色の深き海のその底から、遙か碧空に燃えて吹き上る海底火山の岩漿のごとく、絶えず躍動し、己れと闘ひ、眠ることを知らぬ魂の……

天地を金色に染め変へつつ大海に沈み入る夕陽にも似て、ひたすらその身を炎と燃やしつづけ、今、沈むその身から一羽の海鳥は、茜の空に向つて舞ひ昇るだらうか……。

挑戦者

遙か遠い昔から人はなぜか前進、また、進歩を追ひ求めながら、或る者は、その途上にて夢破れては消え、また、或る者は、目的を達成しながらもなほ、己れと闘ひ、新たに挑みつけ、やがては散りゆく人の身と、あらゆる人の世の営みのその中、

敢て静かで穏やかな日常日々の生活から離れて、苦悩、

孤独、試練、危険、渦巻く激動の世界へと、また一つの

命さへ散らしかねぬ冒険、危険を冒してまでも、愚かにも

何故、人はまた、敢て新たに挑みつけるのだろうか。

遙か碧空と海の、見果てぬ水平線の彼方に憧憬つつ、孤独、

港を離れ、旅立つてゆく、その行く手に待ち受けるものは、

荒海、暗礁、挫折、苦悩、絶望、暗雲渦巻く暴風雨に

巻き込まれ、喘ぎ、苦しみながらも、なほも進みゆく船の……

政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、又、種々の仕事や冒険探検、恋愛、旅行、趣味、生活、遊び、その他、空に、海に、山に、陸に、そして、未知なる領域（世界）へと、人はまた明日、何に向つて挑戦するのだろうか……。

スフィックスの謎

それは遠く最古の文化文明発生当時から今日の機械物質文明に到るまで、恐らく、人間はただ意味なくこの世を生きて消えゆくのみ生活では満足できずに、また、目先の欲、目先の快楽にひたすら溺れ入るだけでも何故か満足できずに、さらに人間としての生きる意味を問ひ、深め、求めながら、尚もあてなく彷徨ふ旅人の……

遠い神話の世界に見らるる希臘のスフィックスは、原野を縦横無尽に駆け巡り得る百獣の王の獅子の如き柔軟かつ強靱な肉体と、知性を宿した、その女顔と、大空を自由自在に飛び翔り得る自由の翼の精神とを兼ね備へ持ち、テーベ市付近の岩の上で、道を通る旅人に、謎を問ひかけてゐたといふ。

遙か紺瑠璃の大空の下、幾千年もの人類の歴史を見つづけ、見下しながらも、頑強に沈黙を愛して語らぬ、スフィックスは、現代を生きる、我々にさへ、時、空間を超えて、今なほ変らぬ謎を問ひかけつづけてゐるのだらうか。

この世で人を何をなし、そして、何処へ行けばよいのだらうか……。

——生きるとは、人間とは、人生とは、そして、自分とは……

スフィックスの謎は、いまだ解き明かされてはゐないのだらうか。

UFO

大爆発と同時に、膨張、拡大し続ける大宇宙の、廣大無邊なる宇宙空間には、無数に光輝き生滅する其等の恒星其他等を集めて群成す何千億の「銀河」の一群に過ぎぬ此の我々銀河系の中の一恒星の、炎と燃えて活動する火輪、その太陽の巨大な熱と光とを浴びて青く光輝く、紺碧の海と緑と水との……

此の地球に棲息する生物の中の人類にも似た、叡知、智慮、智力、文化文明、或は又、其等を遙かに越え得る生物が、果して無限にして廣大なるその大宇宙の何処かの惑星に、若しも存在し得るならば、銀河太陽系の此の地球へは何故の飛来なのか。

妖しい光彩を放ちて、此の地球上にその姿々を、突然として現しては、無限なる空間を變幻自在に舞ひ飛び、世界中の各地にその姿々を見せてはふと、夜空の流星と消えてゆく……

未だ、その実体の、確と解明され得ぬままの……

——謎の未確認飛行物体、UFO——
果して、其等は、遙か宇宙からの使者、なのだろうか……。

月桂冠

——古代ギリシア時代、かの
マラトンの地では激しい戦闘があつたといふ。
ペルシア帝国とギリシア（アテナイ）軍との、
今、そのマラトンの地よりアテナイへの長い道程を
孤独、黙々と走りつづける男があつたといふ。
ひたすら、ひたすら一つの使命を心に深く刻み込んで、
野山を越え、川を渡り、荒野を走り、坂道を登りつめ、
ただ、ただ走りつづける一人の男があつたといふ。

いま、その胸にはなにが去来するといふのだらうか。
いま、その瞳にはなにが映るといふのだらうか。

*

*

ただ、ただなにかを繰り返してゐるのだらうか。
ただ、ただなにかと闘ひつつ、耐へてゐるのだらうか。

*

*

ただその肉体だけは永々として躍動してゐる。
ただその肉体の歩みだけはどこまでも鮮明である……。

ただ、ただ走りつづける一人の男があつたといふ。
野山を越え、川を渡り、荒野を走り、坂道を登りつめ、
その途上で歩みをとめることもできただらう。また、
その途上で自己を慰めることもできただらう。
だが彼は走りつづけるだけの男であつたといふ。
やがてアテナイへとその歩みをひたすら進め、そして、
『わが軍勝てり』と、

戦ひの勝利をアテナイ人に伝へたその直後、
その場で若き生命を散らしたと遙か古の故事に聞く。

——国家（人種）民族を問はず、世界中のあらゆるところで……
政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、また、
医療、工業、商業、農業、漁業、サービス業、冒険、探検、その他等、
今もなほ、各分野で黙々と走りつづけるそのマラソンランナーたちには、
遠い古の戦士にも似た赤き血潮が脈々と流れてゐるのであらう……。
ひたすら、ひたすら遠い道程を走り抜いた数多くの人間たちの
その人類への真の功績者には緑深き月桂樹の枝葉がよく映える……。

短距離ランナー

スタート前の短距離ランナーたちは、
各々の肉体に流れる赤き血潮を、また、
心臓の張り裂けそうな高まりを
全身に散らしながら……
足をかけ、
手を定め、
やがて腰を上げる。
息は殺し、
喉は枯れ、
眼は一点を見つめては、
耳を深く澄まし、
全身の筋肉は
緊張の極限を超えて
微震を起こし、
ただ一瞬の飛躍に賭ける。
すでに勝負の念は、
もはや消え去り、
ひたすら、ひたすら
心の無と耳の音を待つ……。

生の躍動の極限が

今、走る

ネツシー

それは何時頃のことからなのだらうか。かのスコツトランドの
一寒村の静かな湖水に、何やら妖しい生き物が棲むといふ噂が、
世界中の人々の話題となつて現れ、そして、ネス湖の怪獣、――
その名を「ネツシー」と称せらるるやうになつたのは、巨大な

天変地異と共に、此の地球上から死滅したとさるる、中生代に
全盛を盛つたあの巨大な爬虫類の、遠い大昔の姿そのままに、
ネス湖の湖水深く、今もなほ、六千六百万年の時間を超えて、
人知らず、静かに、その地に生き延びて来たといふのだらうか。

その静かな湖水の面に、ふと怪しい波の乱れが起りて広がり、
湖上にその姿の一部を浮上させては、またすぐに湖水深くにと
沈み入つたといふ生き物の、果してその正体は何なのだらうか。

未だにその姿の全貌を確と見し人のぬないといふ、かの

ネス湖の怪獣、ネツシーは、中生代爬虫類の古姿そのままに、
湖水深く、静かに、今も猶生ける恐竜として棲息してゐるのだらうか……。

砂時計

燃え盛り狂ふ真夏の海、浜で、ふとめぐり逢ひし男と女の
一すぢの、愛の深さをお互ひに深く読み量りながら……
永遠を誓ひつつ、身も心も炎と燃やし尽くした熱き砂を
琥珀の器の中に残したままで、何時しか消え去りし人の……

真夏の灼熱の、白き浜辺で二人燃えて過した日々も、今はもう
すでに忘れたはずの、熱き砂の 浜を濡らして 寄せくる
波は、ひきにし潮の 夜には何故か満ちて来る海原の
寄せては返す 月夜の浜のとめどもない潮騒なのであらうか。

深まりて色づく秋も、今宵も、そして 眠られぬ夜の
孤独砂の器を茫やりと眺め入る 空虚で 寂しい
その瞳には、あまりにもろく散つてゆく、ゆれて
はかない恋しぐれ、窓を濡らすは降りやまぬこぬか雨……

深夜の寢室の、ほんのり頬を染め返る想ひは走馬燈にも似て、
幾夜ともなく幻影のやうに、浮んでは駈けめぐる、その
真夏に生命を燃やせし日々の、遠い面影を追ひながめながら、
時は、音もなく、長い夜をさらさらと流れゆくばかり……。

第五部

『一般詩』(口語体)

* 「禁断の恋」のみ(文語体)

蠟燭

神秘なる妖しき女体にも似た蠟燭の……
芯に紅色の炎の燃え上がる時から、
しつとりと色感のどこまでも
白光なる軀を薄紅色にと
じりじりと燃やし深めては、
しなやかに、まばゆく
三色の光輝き艶くその色彩で、
夜ごとの暗闇を照らす炎の
息の微風に激しく変調して、
消えそで消えぬその炎の
揺めく妖光と舞い狂いながら
己が身の芯まで焦がしては、
完膚なきまでに深く燃焼させながら……

柔軟を授かりし蠟、
熱く溶けてしずくとなり、
燃ゆる炎の身の、その
白き肌に白露と滴り落ちては、
暗闇の地下のその奥底から
時、空間を溶かし、湧き上がる
まるで噴火口から満ち溢れて流れ、
地上をじわじわと舐め尽くす、かの
燃え盛り狂う活火山の岩漿のごとく……
地中の坩堝から新たな蜜蠟をかもし出す
炎の妖艶、断末魔とゆらめき、
底深い闇に暁の光を放ち、うすれ、
ああ、と追うきれぎれに、
炎と燃えて、宙に消えてゆくのだろうか。

夢見る乙女

心密かに恋い慕いし想いの
心情も告げずに散った恋……。

そんなやるせない今宵の
オルゴールから響きとおる
清らかなそのメロデーは、
あまりに甘く、せつなく
心にしみ入る魅惑の調べ。

乙女の祈り

そんな想いをひそかに燃やし、
心を燈してくれたあのきらめきも
今では孤独せつなく聞き入るその調べ。

思わず胸をつまらせ
綴る日記の哀れさは、
夢見る乙女のゆらめきなのでしょうか。

静寂な寝室に甘く囁く
そのメロデーに魅せられ眠る夜の
やがて調べの淀む頃、
うるむ瞳に映る夢しずくは、
日記ににじんで消えた文字の
はかない恋の告白なのでしょうか。

禁断の恋

悪魔も密やかに微笑む
甘く寄せては返す潮騒。
陽の沈む黄昏に
姿を美しく染めなして、
南海の浜辺にひっそりと
一輪の乙女は咲き薫る。
しなやかな髪を踊らせ、
身を濡らしながら、
浜に眠る貝殻の
遠い古の恋唄に聞き入るその姿の、

ああ、だがかの乙女は禁断の花
触れてはならぬタブーの花びら。
浜の真砂にその身を許す
まるでかの女神にも似た
濡れし乙女の素肌……
月光に妖しく映えては、
仄青く幻影のやうに揺めきゆれて……

星は遙かに
乙女は遠く微笑む。
ならば椰子の実に刻まん。
禁断の恋
如何にせぬ
唯……
浜風はせつなく囁き、
乙女は月光の渚にゆれる
遠い南海に漂ふ椰子の宵。
唯……

白雪

冬になると
湖水に
白鳥舞うのです。
優美に
おおらかに
舞い降りるのです。

遠い
遠い
北の方の国から
はるばると、
その真白なる
羽を拡げながら……
海を
山を
この地へと
やって来るのです。

長い
長い
旅路のその果て、
この天然の地にて
羽を休めては、
静かに
猛く
枯れ野を
湖水を
色彩るのです。

冬になると
湖水に
白鳥舞うのです。
優美に
おおらかに
舞い降りるのです。
めぐり来る季節の
新たな陽光に

或^{あるい}は清水と流れ、
大地^{うろお}を潤し、
或^{あるい}は翼と羽搏^{はばた}き、
遙^{はる}か碧空^{おほぞら}へと
舞い上がるのです。

囁き

一、なにげないあなたの囁きが、
梅の華にそっと口づける
甘く澄んだうぐいすの音色のように、
この小さな胸のなか、
胸いっぱい深く染み入り酔わせる
このなんともいえぬ
甘い心の陶酔を
私はもうどうしましょう……。

二、なにげないあなたの囁きが、
夜桜にそっと口づける
ほんのり紅い雪洞の音色のように、
この小さな胸のなか、
胸いっぱい熱く燈りて輝く
このなんともいえぬ
甘い心のもしびを
私はもうどうしましょう……。

三、なにげないあなたの囁きが、
菜の花にそっと口づける
やさしく舞う蝶々の音色のように、
この小さな胸のなか、
胸いっぱいきらめき舞い踊る
このなんともいえぬ
甘い心の舞い踊りを
私はもうどうしましょう……。

四、なにげないあなたの囁きが、
春の海にそっと口づける
麗かな陽光の音色のように、
この小さな胸のなか、
胸いっぱいやさしく揺れて光る
このなんともいえぬ
甘い心のきらめきを
私はもうどうしましょう……。

五、なにげないあなたの囁きが、
夜空にそっと口づける

愛を奏でる琴座の音色のように、
この小さな胸のなか、
胸いっぱい深く響き渡りて魅惑る
このなんともいえぬ
甘い心のときめきを
私はもうどうしましょう……。

六、なにげないあなたの囁きが、
白雪にそっと口づける
久方の青い空の音色のように、
この小さな胸のなか、
胸いっぱいそっと解けて光輝く
このなんともいえぬ
甘い心の雪どけを
私はもうどうしましょう……。

七、なにげないあなたの囁きが、
浜の貝殻にそっと口づける
寄せくる白い波の音色のように、
この小さな胸のなか、
胸いっぱい満ち溢れては潤す
このなんともいえぬ
甘い心の潮騒を
私はもうどうしましょう……。

ときめき

一、ふとめぐり逢ふ

あなたの囁くやうな微笑が、
荒寥と寂れた砂漠をさまよふ
旅人のふとめぐり逢ふ泉地にも似て、
もう、だめです。

心はずでに新緑の輝き……

ああ、その潤ひが心の底の底まで染み渡る
この実感をどうしませう……。

二、ふとめぐり逢ふ

あなたの心からの言の葉が、

暮れゆく晩秋の湖畔をさまよふ

旅人のふとめぐり逢ふ夕陽にも似て、

もう、だめです。

心はずでに琥珀色の湖……

ああ、湖水に木の葉がきらめき舞ひ踊る

この実感をどうしませう……。

三、ふとめぐり逢ふ

あなたの熱く澄んだ眼ざしが、

暗く、寂しい海原をさまよふ

旅人のふとめぐり逢ふ灯台の燈りにも似て、

もう、だめです。

心はずでに魅惑の酔ひ……

ああ、その輝きが闇の海原に冴え渡る

この実感をどうしませう……。

晴耕雨読

のどかな村での生活は、
すでに時計と縁を切り、
時の流れは、心で刻む。
太陽輝き、鳥鳴けば、
家より飛び出、畑へと、
あちらこちらと耕せば、
汗は流れて、地に落ちて、
土の香りがたちこめる。
あまりに暑きその時は、
そばの小川に身を投げて、
しばし魚と戯れる……
空に飛びかう鳥たちも、
やがて小川のそばに寄り、
調べのほとり咲く花は、
なんともいえぬ鮮やかさ。
空に暗雲、逆巻きて、
雨風吹けば、家の中、
草木の揺れを耳で聞き、
身は横たえてひじつきて、
あちらこちらと目をくばり
捜し当てたる書物を開き、
時の流れを心の眼で辿り入る。
すでに心こころはいにしえに……
空が晴れば、耕作し、
地に雨降りて本を読む。
のどかな村での生活は、
とうに時計を捨て去りて、
時の歩みは、心で刻む……。

嘘

嘘、

それは心の隠れ蓑。

心の寒さ身にしてみても、

しばし心を温めては、

心をなおさら寒くする。

嘘も時にはオブラート

苦い薬を

包み隠し、

喉元のど通して、

胃で消化する。

嘘は洒落た衣装なり。

人の思惑、気に留めて、

あれやこれやと悩みぬき、

次から次へ衣替え、

嘘は心身食い荒らす。

嘘のための嘘は論外なり。

未だ自己見えず、

言葉の海で溺れている。

最初に言葉ありき。

それが人へのあけぼのなり。

山の木々さえ、

色染めの木の葉を散らして、

きびしい冬に備えるものを

人は言の葉の海に酔いしれて、

その足が宙に浮いている。

言の葉は色艶つや宿す薔薇の花

——薔薇ばらの心に咲き匂におう八重姿

無闇むやみに酔えば、深き棘とげあり

つばめ

真つ赤な夕焼け空には、

あちらこちらにつばめのシルエット

そなたがそれ時でした……

速いな！

ほら、もう虫をくわえてるよ！

でも、どこから来たんだらうね。

こんな夕ぐれ時に……

速いな！

ほら、また虫をつかまえたよ！

でもどこに帰るんだらうね。

あんなに急いで……

ぼくも蛙が鳴くから帰る………

沼釣り

夜明け前の深い朝霧のその中、
沼に小舟を浮かべ、竿をさして、
水面滑らせながら消えてゆく……
沼に棲息する 水草のほとり、
静かに足場を狙い定めては、
やがて竿立て、小舟を据える。
今は目覚めたばかりの魚たちに、
少しばかりその空腹を満たさせ……
仕掛けも水の深さも読み定めては、
やがて餌つけ竿より糸を垂らす。
あとはただ、待っている、その
浮子の微妙な動きと食い込みを……
ただ、ただ、待っている。
やがて東の空から舞い昇る
陽光の輝き、水面にきらめき、
深い朝霧も鮮やかに消えてゆく……
さあ、狙いの魚よ！
浮子がじっと待っている。
遠方には雑木林が佇みその木立から、
野鳥はさえずりながら大空高く舞い飛ぶ……。

風船

子供が
微笑^{ほほえ}んでいます。
広い公園のなかを歩きながら、
手には大きな風船、
青い空^{そら}に映えて
ゆらゆらと、
そよ吹く風にも揺^ゆれて
ふわふわと、
糸に守られながら
軽やかに……

子供が
泣いています。
公園の木陰の下で、
割れちゃったんです。
大きな風船
ほんの些細なことで、
大きな音色に
思わず驚き、
啞然^{おぜん}としては
しばし空白に、
抜け殻^{ぬけがら}を見ては、
その悲しみで
泣いているのです。

子供が
立っています。
公園の大地の上に、
広^{ひろ}がる空^{そら}に
やさしく舞う
鳩^{とび}を眺めながら……
子供が
見つめています。
たった孤独^{そとろ}ぼっちで、
夕映^{ゆづり}えの空^{そら}に
みだれ舞う
野鳥の音色を聴きながら……

子供が
震えています。
夜の暗さに耐えかねて……
夜空に煌めく星群よ！
怯え、震えるその心に
降り注いでやっつてはくれまいか。
その光輝く久遠の光輝を。
夜明けをただ独り待つ身の、
夜の暗さに怯え、震えるその心に……。

氷山

大海に浮かぶ氷山は、
静かにうごめく不気味さよ！
太陽に照らされ、
その姿は優美にゆるやかに流れども、
決して姿を見せず、
決して動きを見せず、
不気味に淀む静けさよ。
コップに浮かぶ割れ氷は、
時の流れにつれ、
次第に溶けて、やがて水と化す。
だが大自然のきびしさの前では、
氷山は溶けがたく、
割れて砕かれた氷塊も
自然の力で新たに結合し、
時より見られる氷山すら、
ほんの一塊いっかたにすぎない。
広大な氷河はもう新たな氷山を……
大自然のいとなみは、
今も静かに流れてる。
春夏秋冬のなか、
様々に姿を変えながら……

水仙

澄んだ泉の邊りには、
水仙の花が咲いています。
美しいその姿を
雪解けの水面に映し出しては、
春の訪れを囁きながら……
麗かな陽光、
そよ吹く風にも心地よく
咲きほころぶ水仙は、
澄んだ泉の邊りを
優美に色彩りながら……
集う人たちには
愛の訪れを告げています。

遠いにしえの
神話のナルキソスは、
水面に美しく映える
麗しきおのが
その姿に恋こがれては、
その場から一時も離れずに
水面に映る己が姿を見入るといふ
その恋ゆえに、やがて若き
その身はその場で朽ち果て、その
朽ち果てしナルキソスの場所からは、
一輪の水仙の花の姿となりて蘇る。
——そのような神話とともに、
澄んだ泉の邊りには、今も
静かに、
やさしく
早春の花が咲いています。

金魚

多くの人で賑わう夜店のあかりの中、
優美に泳ぎ廻る金魚の清々しさよ！

大小多くの和金や長い尾揺らぐ朱文
金や、赤や黒の出目金やら、また、

蘭虫やその他の種類なども飾られていて……

「紙」や「モナカ」などを使って、そこで

楽しみながら掬ったかわいい金魚やら、また、
買い求めた金魚などは家に持ち帰って、家の

水槽の中や或いは庭の小さな池の中へと……。

金魚の餌はと言えば、夜明け頃に、

自転車などを走らせて、近くの

溜池やどぶ川の淀みの中から、

朝露に濡れた草むら踏み分け入り、

赤虫、ボーフラ、ミジンコなどを採取するのです。

そして、何年か前のかつてのかわいい金魚たちも、
今では魚巢に無数の卵を産みつけるようになり、

数日後、その卵の中ではくるくると小さな生命が

動き始め、やがて卵の中からぬけ出て泳ぐ稚魚た

ちも、あちこちに餌を追い求めて動き廻りながら

日増しに成長して、何時しか艶やかな麗姿で

池の水を優美に色彩ることになるのです……

水面に浮かぶ落ち葉が池の底に沈み入る頃、

藁などをかぶせて静かに春を持つのです……。

*

*

夢とロマンを求めて

目次

夢とロマンを求めて

- 一、 若き人へ
- 二、 オリンピック競技
チャレンジヤ
- 三、 挑戦者
- 四、 雄魂
- 五、 スフィングスの謎
- 六、 月桂冠
- 七、 短距離ランナー
- 八、 夢とロマンを求めて
- 九、 不死鳥 1
- 十、 不死鳥 2
- 十一、 英雄（ナポレオン）について
- 十二、 リーダー
- 十三、 人生（人の一生）
- 十四、 「名人・達人」
- 十五、 人生の深み

* 参考文献

若き人へ

若き人へ

——勿論、あれこれ深く言及できる存在なり立場ではありませんが、何時の世でも、また、如何なる時代、如何なる国家、社会においても、恐らく、あらゆる欲望、あらゆる矛盾、あらゆる紛争、揉め事、そして、怨恨、妬み、嫉妬、憎悪、不平、不満、無軌道、犯罪、その他等、もう

ありとあらゆるものがこの世に地上に満ちあふれていることでしょう。また、

政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、工業、商業、農業、林業、漁業、サービス業、福祉、公害、食糧、エネルギー、その他、もうありとあらゆる分野、領域にわたって多種多様な問題が数多く山積していることでしょう。それらの様々な問題に興味を感じ抱き、そして、自ら進んでそれらの問題に積極的にと取り組むことも、もちろん、重要かつ大事なことであるだろう。しかし、ここでとくに若い人に望みたいと思うことは、まず、自分を磨き、育てることから始めてもらいたいということなのです。自分が人間としてまだ未熟であるならば、この世の様々な難題に積極的に取り組んでも、多くの場合、未熟で未解決のまま終わってしまうことが多いただろう。もちろん、この世の様々な問題に積極的に取り組むことは、多くの意義も価値もまた人間形成にとっても大きな意味があるが、ただここで若い人に特に望みたいと思うことは外でもなく、それはやはり、まず、自分を磨き、育てることから始めてもらいたいということなのです。『青春』を心から謳歌することも、もちろん、重要かつ大事なことであるだろうが、それと同時に、また、「一人の人間」となるための「基礎作り」をしつかりとしておくことも、それに劣らず極めて重要かつ大事なことのよう思えるのです。そのためほんの僅かばかりの事柄を、ここに幾つか箇条書きにしておきたいと思う。

- 一、自分の体を何か運動などを通して、無理なくしつかりと鍛え、育てておくこと。
- 一、種々の書物を読み、心の「土壌」を肥沃にし、内的世界を拡大、拡充しておくこと。
- 一、過去の様々な体験を何度か自分なりに反芻し、より高い「経験」にまで高めること。
- 一、何か心から熱中できるものを見つけ出しては、前進、進歩を求めて努力すること。
- 一、自分の思いを何らかの形で実際に表現してみることに。（文章、音楽、絵、その他）。
- 一、自分の心の奥深くに眠っているであろう
 - 一、いわゆる「原石」を見つけ出して、それに磨きをかけること。
 - 一、自分を狭め滅ぼすような道ではなく、
 - 一、自分を真に生かし、育て深めるような道を選ぶこと。
 - 一、自分の夢を、自分の可能性をでき得る限り追い求めてもらいたい。
 - 一、自分の人生に目的、目標を持って、その目標に向かって努力を積み重ねること。
 - 一、小さな自分の殻を何度もうち破りながら、より大きな自分へと脱皮し続けること。
- 一、自分の殻だけに閉じ籠らずに、広く視野を世界の動き、国内の変化、またこの世のいろいろな分野、領域へと拡大、拡充し、また広く社会性や人との交わりなどの人間性なども培い、様々な知識や思考能力なども豊かにしておくこと。そして、今、この時だけでなく、過去、現在、未来というこの大きな時の流れを自覚し、そして、できる限り、過去を踏まえ、未来を見つめ、そして、今、この時

を大事に生きるように心がけること。

――そして、

たとえどのような世の中に変化、変貌しようとも、またどのような社会になろうとも、またいかなる境遇、いかなる苦難、いかなる困難、そしていかなる状況に臨んでも、出来得る限り、自分を見失わず、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得る
そういう大地にしっかりと自分の足を踏んまえ、自分の意志で歩み、自らの人生を切り開き得る、そういう精神の自立した、しっかりとした、深みのある
魅力的な一人の人間になつてもらいたいというのが、誰もがふつう若い人に望む
一般的な願いなり想いではないだろうか。ならば、若き人よ、

他人が自分に対して、どういうことをしてくれるかを問うのではなくて、
自分が自分の人生に対して、なにができて得るかを自らに問うてほしい。また、
他人が自分に対して、どういうことをしてくれたかを問うのではなくて、
自分が自分の人生に対して、なにができて得たかを自らに問うてほしい。

オリンピック競技

オリンピック競技

多種多様に満ちたスポーツ競技をあれこれ観ながら、いつも感じることは、なぜか同じような想いであり、——ある目的に向かつて、生き生きと躍動して

いく人間の姿こそ、美しい……。そこには

むだな動きもむだな飾りもそしてむだな言葉もない。

あるのは長い時間と忍耐とたゆまぬ努力によって

鍛え抜かれた肉体と精神とが今、己れに挑み、己れと闘い、

そして、今、将に自分の限界をさらに人間の限界さえも

敢えて乗り越えていこうと生きて躍動している、その

張りつめた肉体と精神との積極果敢な姿があるだけでしよう……。

想えば、遠く古代ギリシアのその時代を起源とし、その後、

復活された近代オリンピック競技大会以降、その時代、

その時代の多くの人々に広く愛され、育てられ、そして、

今日のような物質文明、機械文明の時代に至っても、なお

世界中の多くの人々を熱狂させ得る力を持っている

オリンピック競技とは、スポーツとは、一体、何だろうか。

そこには遠い昔から今日も尚、永遠に変わりようのない

人間がいかに人間らしくある目的に向かつて生き生きと躍動していく

張りつめた肉体と精神との『原型』があるからではないでしょうか……。

*

*

如何にどうすれば自分の力を最大限に發揮することができるのか。

如何にどうすれば自分の持てる力のすべてを出しきることができるのか。

いろいろ様々な想いが脳裏に浮かんでまた消えていくそのなかで、……

より速く、より高く、より遠く、より強く、そして、より美しく、それはまた、

何もスポーツの世界だけに限らず、あらゆる分野においても人間が人間としての

前進と進歩と歓喜と創造とを深く追い求めては、人間がいかに人間らしく

生きて躍動していく、そこにはむだな動きもむだな飾りもそしてむだな言葉もない

あるのは己れに挑み、己れと闘い、そして、ある目的、目標に向かつて生き生きと

躍動していく張りつめた肉体と精神との鮮やかな姿があるだけではないだろうか……。

ソ
ネ
ツ
ト
十四行詩

挑戦者

遙か遠い昔から人はなぜか前進、また、進歩を追ひ求めながら、或る者は、その途上にて夢破れては消え、また、或る者は、目的を達成しながらもなほ、己れと闘ひ、新たに挑みつけ、やがては散りゆく人の身と、あらゆる人の世の営みのその中、

敢て静かで穏やかな日常日々の生活から離れて、苦悩、

孤独、試練、危険、渦巻く激動の世界へと、また一つの

命さへ散らしかねぬ冒険、危険を冒してまでも、愚かにも何故、人はまた、敢て新たに挑みつけるのだろうか。

遙か碧空と海の、見果てぬ水平線の彼方に憧憬つつ、孤独、

港を離れ、旅立つてゆく、その行く手に待ち受けるものは、

荒海、暗礁、挫折、苦悩、絶望、暗雲渦巻く暴風雨に

巻き込まれ、喘ぎ、苦しみながらも、なほも進みゆく船の……

政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、又、種々の仕事や冒険探検、恋愛、旅行、趣味、生活、遊び、その他、空に、海に、山に、陸に、そして、未知なる領域（世界）へと、人はまた明日、何に向つて挑戦するのだろうか……。

雄魂

夜空に白光なる軌跡を残しながら何時しか消え去りゆくかの彗星の姿にも似て、何時の世にも、時、空間を超えて語り継がれ、消えては再び甦る不死鳥のごとく、その昔から半神と称せ、讃へらるるその英雄の、休みなく活動する巨大な情熱をその内深くで烈しく

燃やし続け、地下、地上、大空の世界を縦横無尽に駆け巡りては躍動しながら、此の世を地上をひたすら走りつづける雄姿の……絶望、暗闇、苦悩、憂愁、苦難、暗礁、暴風雨、泡立つ怒濤、そして、此の世のまた地上の塵埃、煩惱を知りぬいてゐる心の……

深い哀しみを帯びて満ちる藍色の深き海のその底から、遙か碧空に燃えて吹き上る海底火山の岩漿のごとく、絶えず躍動し、己れと闘ひ、眠ることを知らぬ魂の……

天地を金色に染め変へつつ大海に沈み入る夕陽にも似て、ひたすらその身を炎と燃やしつづけ、今、沈むその身から一羽の海鳥は、茜の空に向つて舞ひ昇るだらうか……。

スフィックスの謎

それは遠く最古の文化文明発生当時から今日の機械物質文明に到るまで、恐らく、人間はただ意味なくこの世を生きて消えゆくのみ生活では満足できずに、また、目先の欲、目先の快楽にひたすら溺れ入るだけでも何故か満足できずに、さらに人間としての生きる意味を問ひ、深め、求めながら、尚もあてなく彷徨ふ旅人の……

遠い神話の世界に見らるる希臘のスフィックスは、原野を縦横無尽に駆け巡り得る百獣の王の獅子の如き柔軟かつ強靱な肉体と、知性を宿した、その女顔と、大空を自由自在に飛び翔り得る自由の翼の精神とを兼ね備へ持ち、テーベ市付近の岩の上で、道を通る旅人に、謎を問ひかけてゐたといふ。

遙か紺瑠璃の大空の下、幾千年もの人類の歴史を見つづけ、見下しながらも、頑強に沈黙を愛して語らぬ、スフィックスは、現代を生きる、我々にさへ、時、空間を超えて、今なほ変らぬ謎を問ひかけつづけてゐるのだろうか。

この世で人を何をなし、そして、何処へ行けばよいのだろうか……。

——生きるとは、人間とは、人生とは、そして、自分とは……

スフィックスの謎は、いまだ解き明かされてはゐないのだろうか。

——古代ギリシア時代、かの

マラトンの地では激しい戦闘があつたといふ。

ペルシア帝国とギリシア（アテナイ）軍との、

今、そのマラトンの地よりアテナイへの長い道程を

孤独、黙々と走りつづける男があつたといふ。

ひたすら、ひたすら一つの使命を心に深く刻み込んで、

野山を越え、川を渡り、荒野を走り、坂道を登りつめ、

ただ、ただ走りつづける一人の男があつたといふ。

いま、その胸にはなにが去来するといふのだらうか。

いま、その瞳にはなにが映るといふのだらうか。

*

*

ただ、ただなにかを繰り返してゐるのだらうか。

ただ、ただなにかと闘ひつつ、耐へてゐるのだらうか。

*

*

ただその肉体だけは永々として躍動してゐる。

ただその肉体の歩みだけはどこまでも鮮明である……。

ただ、ただ走りつづける一人の男があつたといふ。

野山を越え、川を渡り、荒野を走り、坂道を登りつめ、

その途上で歩みをとめることもできただらう。また、

その途上で自己を慰めることもできただらう。

だが彼は走りつづけるだけの男であつたといふ。

やがてアテナイへとその歩みをひたすら進め、そして、

『わが軍勝てり』と、

戦ひの勝利をアテナイ人に伝へたその直後、

その場で若き生命を散らしたと遙か古の故事に聞く。

——国家（人種）民族を問はず、世界中のあらゆるところで……

政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、また、

医療、工業、商業、農業、漁業、サービス業、冒険、探検、その他等、

今もなほ、各分野で黙々と走りつづけるそのマラソンランナーたちには、

遠い古の戦士にも似た赤き血潮が脈々と流れてゐるのであらう……。

ひたすら、ひたすら遠い道程を走り抜いた数多くの人間たちの

その人類への真の功績者には緑深き月桂樹の枝葉がよく映える……。

短距離ランナー

スタート前の短距離ランナーたちは、
各々の肉体に流れる赤き血潮を、また、
心臓の張り裂けそうな高まりを
全身に散らしながら……
足をかけ、
手を定め、
やがて腰を上げる。
息は殺し、
喉は枯れ、
眼は一点を見つめては、
耳を深く澄まし、
全身の筋肉は
緊張の極限を超えて
微震を起こし、
ただ一瞬の飛躍に賭ける。
すでに勝負の念は、
もはや消え去り、
ひたすら、ひたすら
心の無と耳の音を待つ……。

生の躍動の極限が

今、走る

夢とロマンを求めて

夢とロマンを求めて

例えば、一九二七年五月二〇日のその朝、ニューヨークの飛行場から出発したスピリット・オブ・セントルイス号は、その後三十三時間半の孤独と苦悩と試練のその究極に、遂にパリへと到達して念願の「大西洋無着陸横断飛行」に成功した若き飛行士リンンドバーグは、まさに大空に自分の夢を追求めつづけ、そして、大空に男のロマンを感じた人ではなかったろうか……。

例えば、当時、大海のその涯では巨大な滝やら怪物などが棲むと未だ信じられていた時代に、敢えて地球円球説を信じて、そして、「西へ西へと航海をすれば、必ずインドに行き着ける」と深く信じて、それを敢えて実行した探検家コロンブスは、その西への航海に自分の人生のすべてを賭けて、西へと、かの新天地（アメリカ）へと図らずも旅立った人ではなかったろうか……。

例えば、若き登山家ウインパーは、当時、魔の山と恐れられていたマッターホルン登頂に、敢えて挑みつづけ、度重なる挫折を何度も何度も繰り返しながらも、遂にマッターホルン登頂に成功した彼と同行の六人の登山家たちは、困難を踏み越えて行く、その一歩、一歩の歩みにこそ、確かな手応えをその全身で深く感じながら歩み進んだ人たちではなかったろうか……。

例えば、考古学者シュリーマンは、八歳の時に見たという「トロヤ落城のさし絵」と、また、ホメロスの「叙事詩」とを深く固く信じて、その後、商人として得た財産の多くをそそぎ込んで、トロヤ遺跡、ミケナイ、ティリンス、その他の発掘、発見、研究に自分の半生のほとんどを注ぎ込んだ彼は、そこにこそ自分の夢とロマンとそして生きがいを感じた人ではなかったろうか。

例えば、若き語学の天才シャンポリオンは、小さい頃から古代オリエントの言語や事物などに興味を感じ抱き、十一歳でヘブライ語、十二歳でアラビア語、シリア語、カルデア語などを学び、そして大学では古代史とコプト語とを修め、そしてかのナポレオンのエジプト遠征の際に、ナイル川支流で発見されたいわゆる「ロゼッタ石」とフィラエ島出土のオベリスクの碑文などとの比較対照から、約二〇年の歳月を費やしついに古代エジプトの象形文字の解読に成功した彼は、古代へのロマンと古代エジプト人の「言魂」に触れることのできた最初の人ではなかったろうか。

例えば、一九〇九年アメリカのピアリー隊らによる北極点制覇により、人々の関心は南極へと向かい、イギリスのスコット、ノルウェーのアムンゼン、そして日本の白瀬隊らが期せずして、一九一〇年に南極へと赴き、そしてスコット隊長率いるイギリスの探検隊とアムンゼン率いるノルウェー隊との人類初の南極点到達をめざしてお互い激しく競い合い、そしてスコット隊長らは、アムンゼンより約一ヶ月ほど遅れて南極点に到達し、その失意の帰途、激しい吹雪と食糧不足と凍傷等により全員が死亡するという悲劇に遭遇するわけだが、前人未到の南極点をめざして旅立った人たちの、その人間の勇氣と意志とその名とをその地に留めた人たちではなかったろうか。

例えば、玄奘こと三蔵法師は、十三の時に寺に入りその後は仏教の研究に励み、その仏教に対する幾多の疑問点を解くために、仏教発祥の地であるインドへと、当時の出国の禁を犯してまでも、敢えて六二九年（二十八歳の頃）、長安からインドへの長い旅にと出発

し、その旅の途上での様々幾多の危難（困難）等を含り越えて、インドへと辿り着き、そこで戒賢らについて仏教を学んだ後、六四五年に多くの教典と仏像とを土産に長安へと帰国し、その後は教典の膨大な量の翻訳書や『大唐西域記』などの書物を遺した三蔵法師は、その「西域」への旅を通して、いわゆる『大悟』への道を自らの努力によって、一歩、一歩、歩み進んだ人ではなかったろうか。

その他、宇宙に大空に大海に山々に大陸にまた様々な湖や沼に河川に地下に地底に、と、数知れぬ挑戦者の姿が、古今東西を問うまでもなく、数限りなく存在したことでありましょう。その行く手がたとえどんなに暑かろうが、また寒かろうが、また如何ような場所であろうとも、また如何なる暴風雨、洪水、竜巻、吹雪、雪崩、海の怒濤、砂塵の嵐に襲われようと、また、たとえ襲い来る迅雷、噴火、大地震、大火、飢え、心苦、肉体的苦極に打ちひしがれようと、またこの世における如何なる苦難、如何なる困難、また如何なる状況、状態に臨んでも、人間はそれらを含り越えていける可能性を秘めているということ、現実にもまた身を以って「実行」することによってこそ、われわれ人間にまた人類に生きる勇氣、希望、夢、ロマン、そして生きる力と、人類の可能性に「一条の光」を与えてくれることにもなるのでしよう。

敢えて大きな困難に挑み続け、越え難き大きな困難を含り越えてゆく肉体と精神力、挑戦者のまさに生きて躍動していく姿こそは、如何にも人間らしい姿なのかも知れない。それは限りない未来に向かつてのわれわれ人類の前進と進歩と創造とを象徴している。——そして、今も、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、工業、商業、農業、林業、漁業、サービス業、福祉、公害、食糧、エネルギー、その他の種々の問題や、また、様々な紛争や犯罪（事件）、事故、難病、宇宙開発、その他、この世におけるあらゆる分野、領域に渡って多種多様な難題が数多く山積していることではしよう。

遙か遠い昔から多くの人々が数知れぬ困難に挑み、越え難き大きな困難を含り越えてきた。現代を生きる我々もまた、彼らの成し遂げた業績と遺志とをしっかりと受け継いで、そして、今なお山積する多種多様な難題に對しても、敢えて挑みつけ、そして、数多くのこの世における解決し難き難題（難問）を一つ、一つ確実にまた堅実に解決していく、或いはまた、各それぞれの分野（領域）においても新しい道を積極的に切り拓いていくという、そういう、われわれも明日に向かつての真の「挑戦者」であるべきではないだろうか……。

*注 登頂には成功したが、下山の際に同行の六名のうち四名が遭難死する。

*注 アムンゼンが南極点に到達したのは、一九一一年の十二月十四日である。

*注 「大唐西域記」は、太宗の勅命により、玄奘が口述し、それを弟子の
弁機に編述させたもの。

不死鳥

不死鳥

遠くその靈鳥はアラビアの遙か広漠たる砂漠地帯の緑泉地の邊りに孤独棲み居ては歲月を送り、何故か果実亦花の類などを余り食はず、乳香また芳しい馨の樹脂などを好みて食ひながら、深く味ひ入る日々の、五百年もの永き歲月を生きにし後に、樫の木或はまた棕櫚の木の頂きに巢を造りて、巢の中には肉桂、甘松、没薬などを集め、積み重ねて、身をそこに横たへては、其等の馥郁たる馨に深く包まれながら最後の息を引き取り、その滅びし親鳥の肉体から、新たに一羽の幼いポイニクス「不死鳥」が誕生し、その幼き鳥も何時しか大きく羽毛も生え揃つて、両翼と力強く、雄々しく成熟する頃には、父親の葬儀を行ひ営むために、遙々アラビアのその地から、大空を舞ひ翔りて遠く埃及のヘリオス神殿へと、巢を遺体を運びて、太陽神の祭壇に置き、その遺体の巢はやがて芳しい炎の中で燃え尽きるのだといふ。

不死鳥は、再び、遠くアラビアの遙か広漠たる砂漠地帯の緑泉地の邊りに舞ひ戻り、孤独その地に宿り棲むといふ、遙か遠き大昔から伝へらるる古代埃及のその不死鳥、神話はまた、この世に於ける出来合ひ的な表面的な「影」の世界を楽しむ時代から離れて、奥深き底知れぬ物事の本質、真実、真理、源泉、また、その生命を深く確かめ味ひ入るといふ根源世界に想ひを深めて、白昼、夕暮、深夜、未明、夜明、時、空間を問はず、休むともなく襲ひ来る孤独な思考、瞑想、また、孤独な夢に憑かれて深く、その身も心も狂ほしく熱く焦がして、息も気も絶え絶えの、苦惱、孤独、暗闇、煩悩、喜怒哀楽、怨念、妬み、嫉妬、憎悪、その他、此の世で味ひ知るであらうあらゆる思ひと、人間、動物、植物、自然、宇宙、そして、また、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、工業、商業、農業、漁業、その他の種々の仕事や冒険、探検、恋愛、旅行、趣味、生活、衣食住、遊び、その他、此の世のあらゆる営みのなかで自ら体験、経験するであらう、また、見聞き学び知つてゐるであらう其等の、此の世で見聞き嗅ぎ味ひ感じ知るあらゆる思ひを、心の坩堝のなかでどろどろに混沌と深く溶かし込んで、その真底から湧き上つて来る想ひの魂、また、生命のすべてを炎と燃やし尽くして燃え盛る果なき思考、また、瞑想のなかに深く耽り入り酔ひ痴れる、その燃え盛り狂ふ炎によつて醸し出さるる芳しい馨、息吹、想ひに深く溶け入り、時を忘れては、深く根源境に酔ひ痴れ溺れ入る没我状態のその最中に、新たな生命を授かるといふ、光陰を長く果しなく重ね過す日々の、突然、遂に不死鳥としての両翼、その金色と赤色の色彩で妖しく光輝くといふ、その自由な精神の飛翔の両翼を得ては、地下、地上、大空、時、空間をさらに超えて、無限なる世界へと八方自在に舞ひ翔り舞ひながら、遠く獲物を追ひ求め続けては、狙ひ定めし獲得を想ふにまかせて捕へ、遙か碧瑠璃の天空へと遠く舞ひ翔り入るといふ遙かその雄姿の、天翔る聖鳥、また、靈鳥の麗姿そのままに、神聖な、また、天空の遙か遠き太古の太陽神の神殿、その幽遠、高遠、神秘なる果しなき無邊無垢なる領域へと、孤独憑かれし如く、不滅の精神の聖域へと舞ひ翔り入るといふ伝説でも、また、あるのだらうか……。

何故か休むともなく絶えず活動しつづけるその精神の、今、肉体の滅び去りゆくその時に、果してその身に宿れる魂は、何処へと、また、地上に残した九天の高みの精神は、幾度ともなくこの地上に甦りて、永遠に滅びることなく、この地上で生きつづけるといふのだらうか……。

不死鳥

遠くその霊鳥はアラビアの遙か広漠たる砂漠地帯の緑泉地の邊りに孤独棲み居ては歲月を送り、何故か果実亦花の類などを余り食はず、乳香また芳しい馨の樹脂などを好みて食ひながら、深く味ひ入る日々の、五百年もの永き歳月を生きにし後に、樗の木或はまた棕緇の木の頂きに巢を造りて、巢の中には肉桂、甘松、没薬などを集め、積み重ねて、身をそこに横たへては、其等の馥郁たる馨に深く包まれながら、最後の息を引き取り、その滅びし親鳥の肉体から、新たに一羽の幼いポイニクス「不死鳥」が誕生し、その幼き鳥も何時しか大きく羽毛も生え揃つて、両翼と力強く、雄々しく成熟する頃には、父親の葬儀を行ひ営むために、遙々アラビアのその地から、大空を舞ひ翔りて遠く埃及のヘリオス神殿へと、巢を遺体を運びて、太陽神の祭壇に置き、その遺体の巢はやがて芳しい炎の中で燃え尽きるのだといふ。

不死鳥は、再び、遠くアラビアの遙か広漠たる砂漠地帯の緑泉地の邊りに舞ひ戻り、孤独その地に宿り棲むといふ、遙か遠き大昔から伝へらるる古代埃及の、その不死鳥、神話はまた、この世に於ける出来合ひ的な表面的な「影」の世界を築しむ時代から離れて、奥深き底知れぬ物事の本質、真実、真理、源泉、また、その生命を深く確かめ味ひ入るといふ、根源世界に想ひを深めて、白昼、夕暮、深夜、未明、夜明、時、空間を問はず、休むもなく襲ひ来る孤独な思考、瞑想、また、孤独な夢に憑かれて深く、その身も心も狂ほしく熱く焦がして、息も気も絶え絶えの、苦惱、孤独、暗闇、煩悩、喜怒哀楽、怨念、妬み、嫉妬、憎悪、その他、此の世で味ひ知るであらうあらゆる思ひと、人間、動物、植物、自然、宇宙、そして、また、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、工業、商業、農業、漁業、その他の種々の仕事や冒険、探検、恋愛、旅行、趣味、生活、衣食住、遊び、その他、此の世のあらゆる営みのなかで自ら体験、経験するであらう、また、見聞き学び知つてゐるであらう其等の、此の世で見聞き嗅ぎ味ひ感じ知るあらゆる思ひを、心の坩堝のなかでどろどろに混沌と深く溶かし込んで、その真底から湧き上つて来る想ひの魂、また、生命のすべてを炎と燃やし尽くして燃え盛る果なき思考、また、瞑想のなかに深く耽り入り酔ひ痴れる、その燃え盛り狂ふ炎によつて醸し出さるる芳しい馨、息吹、想ひに深く溶け入り、時を忘れては、深く根源境に酔ひ痴れ溺れ入る没我状態のその最中に、新たな生命を授かるといふ、光陰を長く果しなく重ね過す日々の、突然、遂に不死鳥としての両翼、その金色と赤色の色彩で妖しく光輝くといふ、その自由な精神の飛翔の両翼を得ては、地下、地上、大空、時、空間をさらに超えて、無限なる世界へと八方自在に舞ひ翔り舞ひながら、遠く獲物を追ひ求め続けては、狙ひ定めし獲得を想ふにまかせて捕へ、遙か碧瑠璃の天空へと遠く舞ひ翔り入るといふ遙かその雄姿の、天翔る聖鳥、また、霊鳥の麗姿そのままに、神聖な、また、天空の遙か遠き太古の太陽神の神殿、その幽遠、高遠、神秘なる果しなき無邊無垢なる領域へと、孤独憑かれし如く、不滅の精神の聖域へと舞ひ翔り入るといふ伝説でも、また、あるのだらうか……。

何故か休むともなく絶えず活動しつづけるその精神の、今、肉体の滅び去りゆくその時に、果してその身に宿れる魂は、何処へと、また、地上に残した九天の高みの精神は、幾度ともなくこの地上に甦りて、永遠に滅びることなく、この地上で生きつづけるといふのだらうか……。

英雄

英雄について

例えば、どういう人物であれば、『英雄』と呼ぶにふさわしい人物であるのか？

それはもちろん、いろいろと「意見や見解」の分かれるところでしょうが、ただ、ゲーテは、かのナポレオン・ボナパルトを評して、次のように言っている。

「……ナポレオンが偉大だった点は、いつでも同じ人間であったということだよ。

戦闘の前だろうと、戦闘のさなかだろうと、勝利の後だろうと、敗北のあとだろうと、

彼はつねに断固としてたじろがず、つねに、何をなすべきかをはっきりわきまえていて、

彼は、つねに自分にふさわしい環境に身を置き、いついかなる瞬間、いかなる状態に臨んでも、それに対処できた。……」

「彼はいつも開悟し、いつも明晰で、決断力があつた。どんな時でも、有利だと認めたこと、必要だと認めたことなら

即刻実行に移すだけの力をそなえていた。彼の生涯は、戦いから戦いへと、勝利から勝利へと進む半神の歩みであつた。まちがひなく彼は絶えず

開悟した状態にあつたといつてもよいだろう。……」

「われわれの目には、不思議に見えるし、ほとんど理解できないね。だが、とにかく事実は事実だつたのだし、しかも、われわれの目の前で起こつたのだからね。……」

「ナポレオンは花崗岩でできた人間だといわれたがそれはとくにその身体についていえることだよ。

あの人はどんな無理なことでもやつたし、また、そうするだけの力もあつたではないか！

熱砂のシリア砂漠から、モスクワの雪原にいたるまで、その間にどれほど数えきれない進軍や戦闘や

野営があつたかも知れないのだ！

またその際、どれほどの苦悩や肉体的困苦にも耐えねばならなかつたことか！

わずかな睡眠とわずかな食事、しかも不断の最高度の精神活動！ブリュメール十八日の恐ろしい緊張と興奮の際に

真夜中になつても彼はまだ一日中何も食事を摂つてはいなかつた。それでも、彼の念頭には、食べものなことなどはなく

深夜に至つてもなお、フランス国民へのかの有名な布告を起草するだけの力を十分に身内に感じていたのだ。

あの人が一体どんな苦難をなめてきたかを考えるならば四十歳になつたときに、彼の身体にはもはや一かけらの

満足な部分も残ってはいなかったらうと考えられる。けれども、あの年になっても、依然として、完璧な英雄ぶりを示していたのだよ。」（ゲーテとの対話）

ええ、まあ、たとえそうだとしても、ナポレオンもまた数多くの人たちを殺傷したでしょうし、また、不道徳なこともあれこれしたんじゃないでしょうかね？

もちろん、そういうことも多々あったかも知れないが、しかし、それでもなお、われわれがナポレオン・ボナパルトという人物に心惹かれるところがあるとすれば、それは恐らく、あの『巨大な悪魔的なエネルギー』と『ほとんど休みなく活動し続ける肉体と精神力』ではないだろうか。

どうしてあのように休みなく活動し続けることができ得るのか、或いはまた、どうしていついかなる瞬間、いかなる状態に臨んでも、それに対処でき得たのか。恐らく、そういうところではないでしょうか。ゲーテの表現が

それほど大げさなものだとは思わないのです。恐らく、ゲーテ自身もそれに近いような人間だったのではないだろうか……。

——この同じ時期に、ゲーテ、ナポレオン、そして、ベートーヴェンというこの三人、三様の人物が、ほぼ同じ時代に生き、そして、

ゲーテは学問、芸術の分野で、ナポレオンは主に政治の分野で、そして、ベートーヴェンは音楽の分野で、それぞれがそれぞれの分野、領域で活躍、活動していたということは、非常に興味深いもののように

思えてならないのです。彼らが共有していたものはなにか。恐らく、「休みなく活動し続ける『自由の精神』であったでしょう。……」

*

*

「その他、状況への適応能力、混乱した状況における臨機応変の能力、あらゆる問題に多くの解決を与え得る豊富な構想力、比類ない知的作業能力、人間についての高い見識と（読心力）、また、すべてを明確に洞察する知力、無用の猶予や実施の遅滞を許さず仕事を成し遂げ得る執務能力、最も困難な問題に対してもすばやく適応し、一問題から全く別の問題にたやすく移ってゆき、また元の問題に何んの混乱もなく戻ることができた。また、ナポレオンにおいて、発想、意志、行動は、信じられないほどのすみやかな一つのはたらきであった。思想と行動の間に、反省と決断のため一瞬のためらいもないようだった。」等々。『また、一日十八時間事務所で過ごし、彼は一枚一枚無味乾燥な報告書や決済書類をめぐりながら、行政の末端から一連隊の会計まで把握し、フランスの政治的、軍事的現実をくみたてていた。そして、彼が沈想におちいると、書齋でも庭園でも、歩きながら肩をゆすり、口をゆがめる。そうすると必ず重大文書の口述があるのだという。また、秘書に新聞を読ませながら入浴するか、三時間も休息するかすれば、活動力は回復したといわれる』等々。（「ナポレオン」アンリ・カルブエ著、井上幸治著）「ナポレオンこそは、遠きを見る眼と近きを見る眼、情熱と勤勉、世界的な知識と世界的な直観、これら両者の才能を一身に兼備した完全な天才であった」という。

〔ジョセフ・フーシェ〕ツヴァイク著

*

*

一八〇三年、ベートーヴェンは、耳の病気に独り密かに悩みながらも、一方では、ナポレオンの活躍に強く心惹かれていて、いわゆる交響曲第三番『エロイカ（英雄）』の作曲に情熱を激しく燃やして専念し、そして、翌一八〇四年の春になって、その交響曲はようやく完成を見、ベートーヴェンは、それをナポレオンに献上する機会を待っていたという。ところが、五月になると、フランスでは人民投票の結果、ナポレオンが『皇帝』の位についてしまったということを聞き知ったベートーヴェンは、非常に驚き、そして、「ナポレオンもまた単なる野心家の一人に過ぎなかったか！」と激しく憤慨し、そばにあった楽譜に近寄っては、その「ナポレオン・ボナパルト」と書かれてあった楽譜の表紙を破り取っては、それを床に叩きつけたとか、あるいはそうではなく、名前の部分だけを消しただけだとかいうような有名な逸話（エピソード）が残されているわけである。ちなみに、ベートーヴェンは、一七七〇年の生まれであり、一方のナポレオンは、それよりも「二歳年上」の一七六九年の生まれになるかと思う。

一方、ゲーテは、もつと高いところから「ナポレオン」という人物を見ていたというのが通説であるが、恐らく、ゲーテは、「ナポレオン」という人物のどこか人間離れた超人的な能力と尋常ならぬエネルギーに驚嘆しながら、人間の能力の極限を見るような思いがしたのかも知れない。

「年をとると」と彼はいった。「若いころとはちがったふうに世の中のことを考えるようになるものだ。そこで私は、デーモンというものは、人間をからかったり馬鹿にしたりするために、誰もが努力目標にするほど魅力に富んでいてしかも誰にも到達できないほど偉大な人物を時たま作ってみせるのだ、という風に考えざるをえないのだ。」（ゲーテとの対話）。

また、これも有名な話であるが、一八〇八年の十月二日、エルフルトにおいて、ゲーテ

はナポレオンに謁見をもとめ、そして、この二人は実際に会っているかと話をしてい
る。例えば、ナポレオンは、ゲーテに会ったその時に、「ここに、人物がいる！」と言ったと
いうことや、また、ゲーテの『若きウエルテルの悩み』を何度も愛読したが、最後の結末
がよくないと言ったこと、あるいはシーザーについての悲劇を書いたらどうかと言われた
時に、ゲーテは、自分にはそういう古典的な文体がないと、答えたということやその他、
いろいろと話をしたと伝えられている。ちなみに、この時、ナポレオンは四〇歳、そして、
ゲーテは六〇歳であったが、それは、最初の「引用文」のなかで、「……けれども、あの
年になっても、依然として、完璧な英雄ぶりを示していたのだ」というのは、この時の印
象などを想い出しながらゲーテは話をしていっているだろう。

さらに、ゲーテとベートーヴェンとの関わり方も非常に有名であり、例えば、ベートー
ヴェンは、ゲーテを非常に尊敬し、詩も愛読していて、それらの詩に自ら幾つか作曲を行
なったたり、また、一八〇九年には、ウィーン宮廷劇場の支配人からの依頼を受けて、有名
なゲーテの戯曲『エグモンド』の「序曲」を初めとして、合わせて十曲の「劇付随音楽」
を作曲している。——ところが、二人が実際に会ってみると、性格の違いからか、どうも
しっくりといかないところがあったらしく、その象徴的な出来事として有名なものが、次の
ようなものである。

それは、二人が庭園でたまたま皇族の一団に出っくわした時に、それを遠方に認めたゲ
ーテは、止めるベートーヴェンから無理にも離れて、早々道ばたに身を寄せたのに対して、
ベートーヴェンは、帽子を真深くにかむり直し、フロックのボタンをはめてから、身を道
ばたに寄せて腕を後ろにして見守っていると、ルドルフ公が、自分を認めて帽子を取り、
また、皇后も自分に挨拶をした、というようなことを非常に誇らしく思うわけである。一
方、ゲーテはと言えば、早々道ばたに身を寄せ、そして、その一団が彼の前を通った時に
は、彼は帽子を手に持ち、頭を深く下げて丁寧な挨拶をしていた。その様子を見たベート
ーヴェンは、その後、「……ゲーテは詩人に似合わしからぬ宮廷的礼儀を重んじる人間」
と評したという出来事である。

また、メンデルスゾーンの手紙の中に、「ゲーテは、最初は、ベートーヴェンについて
の話が出るのを好まなかった様子であったが、やがてベートーヴェンの話が出てきて、無
理に『ハ短調交響曲（第五）』の第一楽章をピアノで弾き聞かせると、これは不思議と彼
を感動させたらしく、しかし少しもそういう様子を見せないようにふるまい」ながら、「こ
の曲は、人を驚かせるばかりで、一向に感動させない」と言っただけだったが、またしば
らくして、「凶暴だ！ 気違い染みている。まるで家が崩れそうだ、皆が一緒にやったら、
一体どんな事になるだろう」と言い、食事の時には、彼はすっかり考えこんでしまった。
……等々であるが、そのような様々な逸話（エピソード）は、ゲーテ、ナポレオン、そし
て、ベートーヴェンという、この三人三様の人物のいわば「人柄」や「個性」などがよく
表れていて非常に興味深いものではないだろうか。

*

*

リーダー

リーダー

指導者がすぐれていること。
それがすべてである。
指導者がすぐれていれば、
必ずよい方向に向かう。

指導者がすぐれていること。
それがすべてである。
指導者がすぐれていれば、
必ず人が集まり、人が育つ。

指導者がすぐれていること。
それがすべてである。
指導者がすぐれていれば、
必ず不可能を可能にしていく。

* * *

指導者が劣っていること。
それが最悪である。
指導者が劣っていると、
なすべき方向が見えてこない。

指導者が劣っていること。
それが最悪である。
指導者が劣っていると、
人心は乱れ、人は育ちにくい。

指導者が劣っていること。
それが最悪である。
指導者が劣っていると、
可能なことさえも
不可能にしてしまう……。

* * *

指導者がすぐれていること。
それがすべてである。
ほかに何もいらぬ。

指導者が真に
優れていれば、必ず、
人は集まり、物は集まり、
そして、不可能さえ可能に
していく真の力となって
いくからである……。

人生（人の一生）

人生（人の一生）

人の一生は、生まれて、生きて、死んでいくこと。
——あとは、その隙間をどう埋めていくかが、まさにその人の人生になっていくことである。

人生そのものにもともと意味や意義があるわけではない。意味や意義などは、自分が生きていくなかで、自分で見つけるしかない。その見つけたものが、まさにその人の生きる意味や意義になっていくことである。

幸せは、どこにあるのか？ 仕事にあるのか、生活にあるのか、それとも、遊びのなかにあるのか。——それは、うそ偽りなく、「自分の心がほんとうに深く満たされている状態」になるということであり、それゆえ、そのような「心の状態」になれるものに逢えた時に、その人にとっては、満足のいくものにめぐり逢えたということになるのだろう。

ただ、問題は、それが永続するものなのか、それとも、そうではないものなのか、それが大きな分かれ道であり、本来、「永続するもの」を「幸せ」と呼びことが多く、そうではないものは、むしろ「満足感」と呼ぶことが多いのではないかと思う。

例えば、「脳」が満たされることと、「心」が満たされることとは、まったく同じことなのか。それとも、なにか違うところがあるのだろうか。この問題は、なかなか分かりにくい問題ではあるが、自分の心がほんとうに深く満たされている状態こそ、まさに「幸せ」な状態と呼ぶことが多く、一方、「脳」が満たされることは、むしろ「満足感」と呼ぶことが多いのではないかと思う。

さて、自分の心をほんとうに深く満たすものは、いったい何かと問えば、それは、自分の心がどこまでも深く溶け合えるものであり、それは、例えば、自分の心が知らず識らずのうちに探し求めていたものは、まさに「これだ！」と心の底からそう思えるものにめぐり逢えた時こそ、まさにその人にとっては「かけがいのないもの」にめぐり逢えたということであり、そういうものこそは、その人の心をほ

んとうに深く満たすものであるとともに、それは、一人ひとりみなそれぞれ違ったものになるということである。

*

*

名人・達人

「名人・達人」について

それは、もうどのような「分野・領域」の人たちであつてもよいが、いわゆるその道の「名人・達人」と真に呼ばれているような人たちが、例えば、「初心者」なり「素人」と呼ばれているような人たちの言動を見ていて、いつも感じることは、恐らく、次のようなことではないだろうか。それは、つまり、

むだな「動き」があまりに多過ぎるといふことでしょう。

むだな「飾り」があまりに多過ぎるといふことでしょう。

むだな「言葉」があまりに多過ぎるといふことでしょう。

そして、「初心者」も次第に「成長・成熟」して来るにつれて、……

むだな「動き」が次第に少なくなるということでしょう。

むだな「飾り」が次第に少なくなるということでしょう。

むだな「言葉」が次第に少なくなるということでしょう。

そして、「名人・達人」なる域に真に達するほどになれば、恐らく、

むだな動きなり飾りなりあるいはむだな言葉というようなものは何時しか消え去り、そして、その質、内容、密度、集中度、

あるいは充実度、完成度、完璧度というようなものは、恐らく、

あらゆる角度からの鑑賞にも十分に耐えられるほどになっているのだろう。

そういう「名人・達人」の「技」なり、「芸」なり、「仕事」ぶりを

じっくりと深く味わうのもまたひとつの「醍醐味」ではないだろうか。

——これは、余計なことになるかも知れないが、

手元にはいつも最高のものを置いておくこと。

そうでないと、それほどでもないようなものがなにか

非常にすぐれたもののように思えたり、あるいは見えた

りしてくるものであるから。

真に優れた最高のものは、

常に、「希有」しかない。

なぜならば、それ以下のものはほとんど

色褪せてしまうことが多いからである。……

人生の深み

人生の深み

この世にはもうありとあらゆるものや活動などに満ちあふれているわけだが、それは、例えば、人間、動物、植物、自然、宇宙、建築物、乗物、製品、言葉、色、音、香り、また、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、工業、商業、農業、林業、漁業、サービス業、冒険、探検、恋愛、趣味、生活(衣食住)、映画、テレビ、ラジオ、動画、新聞、雑誌、書物、漫画、旅行、行事、祭り、賭事、遊び、犯罪(事件)、事故、その他、もうありとあらゆる分野、領域に渡って、多種多様な活動や出来事に満ちふれているかと思う。

しかし、ふだんわれわれは、それらの対象の表面的なところをあれこれさまようことが多く、それらの対象の奥深くまで、あるいはそれらの対象の根源にまで溯さかのぼっていくということは、意外に少ないのではないかと思う。それゆえ、それらの対象の表面的なところをあれこれ一般的にさまようだけではなく、もつと奥深くまで、あるいはもつと根源的なところまで深く入っていくということも、また、われわれ人生をより深めていくことになるのではないだろうか。

例えば、同じ音楽を聴いても、同じ絵、彫刻、陶器を観みても、同じ人間、動物、植物を見ても、同じ風景を眺めていても、同じ書物を読んでも、同じ映画、動画、DVDを観ても、同じ講演、授業、話を聞いても、同じ芸能、民芸を観ても、同じ新聞、雑誌、漫画を読んでも、同じスポーツ、祭り、遊びを見ても、同じ放送・番組を見ても聞いても、同じ料理を食べても、同じ衣装、付属品アクセサリーを見ても身に纏まとっても、同じ香りや匂いを嗅いでも、同じ物や製品などを見ても、触れても、その他、たとえ同じものを見ても、聞いても、香りを嗅いでも、味わっても、また、触れても、人によってその「受け止め方」は、みな一人ひとり微妙に違って来るだろう。……

ならば、自分は(この世にあるありとあらゆるものや活動などに対して)、その対象をどのくらい深くまで正確かつ厳密に「見分ける」ことができるだろうか。その対象をどのくらい深くまで正確かつ厳密に「聴き分ける」ことができるだろうか。その対象をどのくらい深くまで正確かつ厳密に「嗅ぎ分ける」ことができるだろうか。その対象をどのくらい深くまで正確かつ厳密に「味ひ分ける」ことができるだろうか。その対象をどのくらい深くまで正確かつ厳密に「感じ分ける」ことができるだろうか。その対象をどのくらい深くまで正確かつ厳密に「とらえる」ことができるだろうか。

人によって、その「深さ」は、それぞれ一人ひとりみな微妙に違ってくるだろう。ならば、あれこれ表面的なところを意味なくさまよう「影」の時代から離れて、もつとその対象の中に深く溶け入っては、その対象を内から深く感じ知るといふ「内感」(直観)や「共感」の時代へと移行させて、そして、この世のありとあらゆるものに対して、理解をより深めていくという、それが、いわば「人生の深み」と呼んでもよいものではないだろうか。——例えば、人間、動物、植物、自然、宇宙、建築物、乗物、製品、言葉、色、音、香り、また、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、工業、商業、農業、林業、漁業、サービス業、冒険、探検、恋愛、趣味、生活(衣食住)、映画、テレビ、ラジオ、動画、新聞、雑誌、書物、漫画、旅行、行事、祭り、賭事、遊ギャンブルび、犯罪(事件)、事故、その他、もうこの世にあるありとあらゆるものまたあらゆる活

動の、それらのどういいうものであるを問わず、——その対象の中に深く溶け入っては、その対象を内からじっくりと深く厳密に見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける、あるいは深く厳密にとらえる。そして、

その対象の「本質、真実、真理、源泉、その他」と深く交わって、楽しむ。

その対象の「本質、真実、真理、源泉、その他」と深く溶け合って、喜ぶ。

それが、いわば「人生の楽しみ」であり、また、「人生の喜び」でもあり、そして、それこそは、まさに「人生の深み」と呼ぶにふさわしいものではないだろうか。

*

*

「参考文献」

- ※底本「ゲーテとの対話」上中下（「岩波文庫」）
- ※底本「ナポレオン」アンリ・カルブエ著、井上幸治著（「岩波新書」）
- ※底本「ジヨセフ・フーシェ」ツヴァイク著（「岩波文庫」）